

為替手形発達史——一四〇一八世紀——  
(1)

R・ドウローヴェル 著  
楊 枝 嗣 朗 訳

Raymond de Roover, L'Evolution de la Lettre de Change, XIV<sup>e</sup>-XVIII<sup>e</sup> siècles, Paris 1953.

目 次

序 言 (F・ブローデル) (略)

巻頭の辞 (略)

序 章

- 一 本書の課題
- 二 従来の諸研究への一瞥
- 三 為替手形発達の諸段階

四 為替契約と利子 (usure) に関する教会の教義

第一章 十四世紀における起源

一 ジエノヴァ等における銀行と為替の生成

二 ジエノヴァの公証人の略註による初期の為替契約

三 為替手形の原型である「為替を原因とする契約証書 (instrumentum ex causa cambii)」

四 ジエノヴァ・シャンパーニュ大市間の為替取引——貨幣市場の誕生——

五 シエーナにおける為替契約——同一地での期限付為替——

六 「為替を原因とする契約証書」から為替手形へ

七 「為替を原因とする契約証書」と為替手形との純粹な形式上の相違 (以上、本号)

第二章 為替手形と貨幣市場の発達 (十四～五世紀)

一 為替契約とその証明及び履行証書——為替手形——

二 ダチニ古文書からの資料による典型的な為替取引 (一三九九年)

三 為替手形の文言、為替の価格・相場、銀行所在地での相場の決定

四 為替相場と利子——スコラ学説——

五 為替相場に影響を与えるその他の諸要因——貨幣の貶質と現送点 (specie points) の役割——

六 為替相場と国際収支

七 為替相場と為替投機

八 中世貨幣市場の一般的性格

第三章 十六世紀における貨幣市場の転換

一 貨幣市場の拡大と交易の増大

二 スコラ学説——その普及と発展——

三 中世的伝統の残存

四 大市は新種の為替を生み出したか？ 振替と相殺による決済、エク・ドゥ・マール (écu de marc) 、

カンビオ・コン・ラ・リコルサ (cambio con la ritorsa)

五 スペインの特殊な状況

#### 第四章 裏書の起源

一 問題の現状

二 中世における債権の譲渡性

三 低地諸国、とくにアントワープにおける裏書の経緯

四 イタリアにおける裏書の起源

五 スペインにおける裏書の生成

六 特殊な事例——イングランド——

七 フランスとドイツにおける裏書の普及

八 裏書の法的、経済的影響

#### 第五章 割引業務

一 「割引」という言葉の歴史

二 割引と利子に関する教会の教義

三 為替と利子

#### 四 割引と銀行制度の構造

#### 五 付随的問題——自筆為替手形から印刷用箋使用へ——

#### 結論

証拠書類——さまざまな都市や時代の為替手形——

訳者あとがき

## 序章

### 一 本書の課題

十九世紀以前の為替手形の発達は、少なくとも経済史と法制史の二つの学問領域にまたがる、相変らず複雑な研究課題である。この問題を明らかにするためには、思想や感情の影響をも考慮しなければならないであろう。他の問題と同様にここでも、思想等は、たびたび事件の進路をさだめ、諸制度の運命を決定してきた。実際、為替手形に関して、神学の決定的な意義を認めないという誤りを犯してきたのである。利子に関する教会の教義は、信用証書の発展にきわめて重要な役割を演じたのである。最後に——別な必要から——政治経済学の教えを考慮に入れる必要があるだろう。法学者はそれを看過するか、まちがって取り扱うという誤りを犯してきた。例えば、為替取引がまさに正貨の現送を排除することを目的としている時に、彼等は見当はずれにも正貨の現送をもちこんでいる。<sup>1)</sup>

複雑な問題であるが故に、いろいろな学問から得られる基礎的原理を引きだし結びつけることは、常に困難である。

為替手形の場合には、これらの諸原理は、歴史家達が糸のつながりを見失しない、指の中で糸を切ってしまったりにしているひとつの縫れた糸玉を形づくっている。恐らくすべてこれらの困難のために、為替手形の歴史は、断えず相矛盾し、真実と誤謬をこつちやにまぜあわせながら、たびたび、巧妙な理論や論争の出現に好都合な分野となってきた。

しかしながら、本研究においてわれわれは、この問題の再検討のために先人の諸業績を出来るだけ利用するつもりである。そこから得られた結果について再び論争しても何らの利益もみられないであろう。無駄な論争に入りこんだり、小さな誤りを不必要に指摘したりすることを避けながらも、しかし、不一致が重大な点にもとづく場合には、勿論、われわれは批判の権利を留保するであろう。しかしなによりも、叙述が進むにつれ、われわれはたびたび新資料や、少なくとも今日までみすごされてきた資料から明らかにされたわれわれ自身の研究結果を有効に使うであろう。非常に数多くの、一級のこれら資料から、われわれはひとつの総合を試みることを許されるであろう。それが先例よりも、ただの一次的なものでないことを期待しよう。そして、それはまちがいに新らしい研究への出発の基礎となりうるであろう。

(1) 十六世紀以来、経済学者は、現送費用が為替相場の決定にかかわらず、ただその変動幅を決めるにすぎないことを指摘してきた。にもかかわらず、今日においてすら、この誤った主張がみられる。

## 二 従来の諸研究への一瞥

ドイツ人のG・F・フォン・マルテンス<sup>(2)</sup> (Georg Friedrich von Martens, 一七九七年)とF・A・ビーナー<sup>(3)</sup> (Friedrich August Biener, 一八四六年)は、為替手形や裏書の起源を研究した最初の人達である。これら二人の先駆者の著作

は、彼等の時代には賞讃に値したとはいえ、今日ではもはや科学的な価値をほとんどもっていない。ただ道を切り拓いてくれたということでは、彼等に感謝しなければならない。

フォン・マルテンスやビーナーの後には、W・エンデマン (Wilhelm Endemann) がつづく。彼は、一三世紀以降の煩瑣哲学のモラリストや法学者を指し示す彼等に特有な名称である「博士衆 (docteurs)」の経済的教義に関する大著の中で、数章にわたって為替契約を論じた<sup>5</sup>。彼は非常に博識で、彼の考証学的知識は驚くばかりであるが、しかし彼が常に正確に理解していたかどうかには若干、疑問がある。実際、その合法性が「博士衆」によって論争された為替取引の明解での確な説明を、彼はどこにも与えていないのである。彼は問題の法律的、理論的側面に関心をいだき、取引技術や貨幣市場の機構に立ち入って研究する必要性を認めなかった。そのため、全く論理的のみ取り扱わねばならなかったであろう。しかしこの不十分さにもかかわらず、彼の著書は、利付貸借や為替やその他の複雑な問題に関する「博士衆」の諸文献の中にわけ入る不可欠の手引となっている。

エンデマンが為替契約に信用取引が含まれていることを示した——さもないければ、モラリスト達がそれに首をつっこむ理由はなかったであろう——にもかかわらず、彼以降の法学者は、その意義を十分に認めず、要するに中世の手形の中にあくまでも支払手段しかみないという誤りを犯した。世界商法史に関するL・ゴルトシュミット (L. Goldschmidt) の大著は、少なくとも無数の書誌学的参照をもつため、研究の不可欠の手段であり、今後長くそうであろう。ゴルトシュミットは、為替手形の本源的機能が一地から他地への資金の移転であることから、為替手形は何よりも送金手形であると考えている<sup>6</sup>。銀行家がいわゆる正貨輸送のリスクを引受けるが故に、為替契約は海上貸付にその起源をもつと、彼は考えている<sup>6</sup>。この二点についてのゴルトシュミットの主張は、A・シャウベ (Adolf Schaubе) によつてきびしく批判された。シャウベは、躊躇することなくゴルトシュミットの見解に反対の見解をいだし、別な理由から、為替手形とその先駆形態たる「為替を原因とする契約証書 (instrumentum ex causa cambi)」

が何よりもまず、信用手段であつたと主張している。彼はつづいて、ゴルトシュミットが銀行家の役割について間違っているとの確に指摘している。銀行家は、正貨を外国に輸送し引渡すことを引受ける手形の供給者 (Wechselgeber) であるところか、一般に、輸出者により市場に提供された手形を受けとつてその地で信用を供与していた手形の取り手 (Wechselnehmer) にほかならなかつた。<sup>8)</sup> したがつて輸出者が輸送のリスクをになうのである。しかも、通常、輸送されるのは商品であつて、めつたに正貨ではなかつた。かくてシャウベが正しく、ゴルトシュミットの主張は支持されないのである。それは事実と一致せず、経済学の最善のすでに確立された諸原理から逸脱するものである。それに反して、ゴルトシュミットは、為替手形がまさしくその原型として「為替を原因とする契約証書」をもっているという肝心なめの点を正しくみていた。ただ彼は、後にみるようにそれを誤つて「他地払約束手形 (domizilierter Eigenwechsel)」と呼んでいる。<sup>9)</sup>

その後の解説者の文献によつて書かれた為替契約の法的性格に関する無味乾燥な二巻本において、C・フロイント (Carl Freund) は、為替手形が君主や政府当局から国庫の係の者に向けて出された支払命令書あるいは支払委託書からうまれたことを証明しようとしたが、<sup>10)</sup> これは我々の見解によれば、ほとんどあたつていない。いつの時代でも正當な、しかるべき形式の許可状や証拠書類なしに支払を行うことは、「役人達」には禁じられていた。今日でも、それが行政の通常のやり方である。どうしてそのようなものが単なる委託以上のものである為替手形を生み出すであらうか。実際、為替手形はただ単に支払指圖書であるばかりか、その上、為替取引と信用取引とに立脚し、為替相場がすでに需要供給法則によつて決定されていた取引所や市場の存在を前提とするものである。公權力によつて発行された支払委託書がそういった特質をもつていないことは確かである。要するに、少なくともわれわれの考えでは役所の慣行が商業の諸慣習にわずかな影響すら及ぼすことはなかつた。ただ、第七回十字軍の頃、聖ルイの発行した支払委託書が為替手形と若干類似していたことは、われわれも認めなければならぬ。<sup>11)</sup> この類似が本當の

親子のような関係なのかどうかを知ることがまだ残されている。

G・フスティッヒ (Gustav Lastig) はどうかというと、為替手形の起源は、預金者が当座預金をもつ両替商かあるいは銀行家宛に、はじめのうちは専ら口頭での、あるいは後の書類での振替指図を与えたことの中に求められるべきであるとした。<sup>(12)</sup> そこで言われているのは、明らかに小切手の起源であって、為替手形のそれではないとわれわれは考える。事実、小切手は単なる支払指図であって、今なおイタリア語で *assegno bancario* と呼ばれている。小切手を為替手形と同一視しようとする法学者は、いまひとつの誤りを犯していることになる。歴史的に、為替手形と小切手の起源は異なっている。

ドイツ人とちがつてイタリア人は、為替手形の起源についての仮説を提示することを慎重にさしひかえてきた。しかし彼等は主に一四・五世紀の為替手形の発達を研究してきた。イタリア諸都市の法令の中の商法に関するA・ラッテス (Alessandro Lattes) の名著が、今なおこの広大な分野での最良の著作である。<sup>(13)</sup> その豊富で確かな資料は言うに及ばず、ラッテスの説明は、起源の解説においても、またまったく異なる議論のない中であって、その簡潔さ、明晰さ、もつともらしさの点で抜き立てている。著者は、しばしば最良の簡潔で論理的な説明を特に好んでいた。

E・ベンザ (Enrico Bensa) は、プラートにあるフランチェスコ・ダニ文書の中に所蔵されている一四世紀末と一五世紀はじめの数百枚の手形を調査した。彼は一四一〇年に死亡したこのトスカーナの商人の伝記の付録にその若干を公表している。<sup>(14)</sup> これらの資料の価値と興味にもかかわらず、残念なことにベンザは、それらひとつひとつを考察することなく、それらの取引にかかわる手紙や会計文書とそのつどそれらを比較対照しようとは夢にも思わなかった。そうしたことがなされず放置されたことは、まことに残念である。

イングランドにおいて最良の労作は、M・M・ポスタン教授の論文と、W・ホールズワース卿の記念碑的なイギ



リス法制史の第八巻の中の一章である。<sup>15</sup>これら二人の著者は、いまだイングランドでは提示されることのなかった起源の問題については、付随的な関心しか示さなかった。なぜならば、為替の使用はイタリア人によってイングランドに導入されたが、一五世紀中葉以前にはイングランドの商人の間ではいまだ普及するにいたらなかったからである。その当時でも、この新機軸たる為替手形は、多くの反対に出会い、かろうじて入りこんだにすぎなかった。一六世紀においてすらイングランドでは為替投機はいっせいに抗議の叫び声に直面していた。この同じ時期にコモン・ロー法廷の時代に逆行的な気風と商人裁判所の衰退は、債権の譲渡、とりわけ商業手形の譲渡性に新たな障害をおくこととなった。かくて、為替手形についてはイングランドは、大陸とは対照的に特別な位置を占めることとなる。

ドイツ人によって先鞭をつけられたこれらの研究は、フランスでは考証学的研究の情熱に燃えた実業家A・セユー (André-E. Sayous) に引き継がれた。彼は歴史研究に完全に没頭し、彼の人生の非常に活動的な晩年を資本主義の起源に関する研究に捧げた。資料収集のために彼は、イタリア、スペイン、低地諸国へと幾度となく旅行し、あらゆる古文書館や図書館を訪ねたのである。残念なことにもセユーは、彼の研究を一冊の書物に纏めあげる忍耐も機会をも決してもつことはなかった。彼は研究の成果を事実と創見に満ちた論文の形で、あれこれの一〇数冊の雑誌に公表した。<sup>16</sup>為替手形に関する研究の中で、彼もまた未刊の資料に照らし、商業や銀行の慣行の発達を考慮に入れたが、<sup>17</sup>為替手形の起源の問題を再検討した。これこそドイツの法学者、ゴルトシュミットやその一派がまさに見過ごしてきたことである。しかし、セユー自身この道十分に進んだとは、恐らく言えないであろう。かくて、彼は貨幣市場のメカニズムの研究を十分に深めず、その考察と結論において為替相場から出発しなければならぬことを理解しなかった——その詳細は実務家の目からみて大いに興味深い——。実のところ、銀行家達は、利付貸借を禁止されていたので、彼等の利益を手に入れるために如何に行動していたのであろうか。この点について、セ

ユーは曖昧なままである。彼は、銀行業者がある時は主に為替をあてにして利を図っていたといひ、またある時には手形割引に従事していたと断言している。<sup>(20)</sup> さて、手形は割引かれていたのか、あるいは割引かれていなかったのか。いったい、どちらなのか。

セューは他の本質的な点で自家撞着をきたしている。彼は、論文のひとつでシャウベが正しいとして、為替手形が信用と資金移転の二重の機能を果たしていたと明言しているが、しかし、別なところで彼は、バルセロナ市では一五世紀には為替手形がほとんどもっぱら資金移転の役割を果たし、めったに利付貸借を偽装するためには使われることがなかったことを証明しようとしてゐる。<sup>(22)</sup> だが、このようなことは起りようがない。すなわち、手形金額が実際、支払われる条件で、隔地で支払われる為替手形の振出は、必然的に信用取引を生ぜしめるのである。さらに、セューのこの断言は、丁度、バルセロナに商館 (Tondaco) を持っていたフランチェスコ・ダチニの帳簿から我々自身が確認することの出来た事実とも一致しないのである。

最近、商業手形史の研究をあらわしたのは、ハーバード大学のかつてのわれわれの恩師である A・P・アッシャー (Abbott-Payson Usher) 教授である。一九四三年に教授は、二巻本の地中海諸国における初期預金銀行についての著作の第一巻を公刊した。<sup>(23)</sup> 第二巻は、イタリアでの初期預金銀行の研究にあてられることになっている。第一巻は、とりわけバルセロナでの預金銀行をもっぱら取り扱っているが、しかし、その序論で商業手形、すなわち債務証券、小切手や為替手形の歴史について概説している。この序論において、A・P・アッシャーは、流通性原理が法律家達によつて認められないかぎり、手形割引が発展しえないことを論証しようとしている。<sup>(24)</sup> ところで、信用の主要な手段である為替手形が流通性のある証券になったのは、やつと一七世紀のはじめであつた。その時期以前には、為替手形は流通することも、割引かれることもなかった。A・P・アッシャーによれば、これら二つが欠けていることが初期預金銀行の組織と機能の特質をよく説明している。<sup>(25)</sup> 初期預金銀行の不安定性は、主に難局時に容

易に動員しうる流動的資産の欠如からきている。実際、これら銀行は、顧客に信用を開設していたが、同時に、よ  
り危険な慣行であったが、資産の一部を直接、商業に投資していた。

この点について何らの批判がなされようと、大方、アッシャー教授が正しい。われわれ自身もブリュージュの  
銀行についての著書において同様な結論に達した。すなわち、預金振替銀行は、一般に為替取引には従事していな  
かった。例外は常にあるが、それは為替業者やあるいはマーチャント・バンカーの独占的領域であった。事実、フ  
イレンツェのマーチャント・バンカーやそのもつとも有名なメデイチ家は、要求払預金も受け入れ、「勘定記入で(en  
écritures)」すなわち勘定振替によってフイレンツェ内の支払を引受けていた。<sup>(26)</sup> 恐らくアッシャー教授は、利付貸  
借に関する宗規上の規則の意義について、より一層、強調することができたのではないだろうか——示唆してはい  
るが——。<sup>(27)</sup> 法理論の多くの討議が説明を非常にわかりにくくすると反論することができよう。しかし、そうした付  
随的な論議にとどまっても無意味である。本書は、ひとつの道を開くことになる。

(2) Georg Friedrich von Martens, *Versuch einer historischen Entwicklung des wahren Ursprungs des Wechselrechts*,  
Göttingen 1797.

(3) Friedrich August Biener, "Historische Erörterungen über den Ursprung und den Begriff des Wechsels", *Abhandlungen*  
*aus dem Gebiete der Rechtsgeschichte*, I, Leipzig 1846, S. 59-159.

(4) Wilhelm Endemann, *Studien in der romanschanonischen Wirtschafts- und Rechtslehre*, Berlin 1874-1883, 2 vol. わ  
れわれは「博士衆」という用語以上に申し分のない用語を見い出しえなかった。その上、それは彼等が自らを示す用語でも  
ある。われわれはここでそれをつかうが、この用語は、聖トーマス・アクィナスやその追従者達の教義にしたがって、(交換や  
分配の) 社会公正に関する書物を執筆した、神学、市民法あるいはカノン法についての「博士衆」のすべてを意味している。  
これらの論説は、一七世紀においてすらスコラ的方法に従っていたものと似ている。

(5) L. Goldschmidt, *Universalgeschichte des Handelsrechts*, Stuttgart 1891, S. 403. かつび彼は為替契約を以下のように定義し  
ている。「為替取引は、中世的ローマ法的意味においては契約による『送金(Remittirung)』すなわち、一地から他地へのあ

る貨幣額の指図である」。この定義は不完全であるが故に、不正確である。ゴルトシュミットのすべての誤謬はここから生じている。

(6) *Ibid.*, S. 412-415.

(7) ヨハンゴットの論文参照。A. Schaube, "Studien zur Geschichte und Natur des ältesten Cambium", *Zeitschrift für Nationalökonomie und Statistik*, 65, 1895, S. 153~191, 511~534. 以下の三編の論文の中で彼は、為替手形の起源に関する彼の著の理論を説明した。A. Schaube, "Einige Beobachtungen zur Entstehungsgeschichte der Tratte", *Zeitschrift der Savigny-Stiftung für Rechtsgeschichte, Germanische Abteilung*, XIV, 1893, S. 111-151. "Das angeblich älteste Campsorengeschäft", *Zeitschrift für das gesamte Handelsrecht*, id., 41, 1893, S. 333~360. "Die Anfänge der Tratte", *ibid.*, 43, 1895, S. 1~51.

(8) 当然、銀行家は外国為替の買い手でもあり、売り手でもある。例えば、巡礼者、学生、あるいは旅行者のために信用状を発行する時には、銀行家は売り手であった。しかしながら、銀行家の主要機能が手形を買うことによって信用を与えるものであったことには変りはない。すなわち、ゴルトシュミットが銀行家に帰した機能と逆のものである。

(9) Goldschmidt, *Universalgeschichte*, S. 417-419.

(10) Carl Freundt, *Das Wechselrecht der Postglossatoren*, 2 vol., Leipzig 1899~1909.

(11) André-E. Sayous, "Les mandats de saint Louis sur son Trésor et le mouvement international des capitaux pendant la septième croisade", *Rev. hist.*, 167, 1931, pp. 254-304.

(12) Gustav Lastig, "Beiträge zur Geschichte des Handelsrechts", *Zeitschrift für das gesamte Handelsrecht*, 23, 1878, S. 138-178.

(13) Alessandro Latte, *Il diritto commerciale nella legislazione statutaria città italiane*, Milano 1884.

(14) Enrico Bensa, *Francesco di Marco da Prato*, Milano 1928, pp. 152~168, 319~351.

(15) M.M. Postan, "Private Financial Instruments in Medieval England", *Quarterly Journal of Economics*, 23, 1930, S. 26-75. William S. Holdsworth, *A History of English Law*, VIII, London, s. d., pp. 113~192. 以下の論文は無題としておきたい。Edward Jenks, "On the Early History of Negotiable Instrument", *Law Quarterly Review*, 9, 1893, pp. 70~88.

(16) ヤヌーの一九三五年以前に公表された業績目録は、以下にみられる。Maxime Glansdorff, "Les travaux d'André-E. Sayous

- sur l'histoire économique", *Rev. écon. intern.*, mai 1935. これらの論文を編集したものがパリ国立図書館にある。
- (17) これらの研究の主たるものは次のものである。"L'origine de la lettre de change", *Rev. hist. de droit fr. et étr.*, 4<sup>e</sup> série, 12, 1933, pp. 66~112. 他は以下のとおりである。"Les transferts de risques les associations commerciales et la lettre de change à Marseille pendant le XIV<sup>e</sup> siècle", *ibid.* 14, 1935, pp. 469~494; "Note sur l'origine de la lettre de change et les débuts de son emploi à Barcelone (XIV<sup>e</sup> siècle)", *ibid.* 13, 1934, pp. 315~322; "Les méthodes commerciales de Barcelone au XIV<sup>e</sup> siècle, surtout d'après des protocoles inédits de ses archives notariales", *Estudios universitarios catalans*, 18, 1933, pp. 209~235; "Les méthodes commerciales de Barcelone au XV<sup>e</sup> siècles, d'après des documents inédits de ses archives : la bourse, le prêt et l'assurance maritimes, les sociétés commerciales, la lettre de change, une banque d'Etat", *Rev. hist. de droit fr. et étr.*, 15, 1936, pp. 255~301. この文献リストは、決して完全なものではない。
- (18) それは以下の論文の中ではじめて示された方法である。Jean Lescure, "Esquisse de l'évolution du change et des théories relatives au change", *Rev. d'hist. des doct. écon. et soc.*, 3, 1910, pp. 48~69. その方法は、このように・マンブッチ (Giulio Mandich) がわれわれ自身によつて発展せられた。
- (19) これはセユーが以下の論文で到達した結論である。"Observations des écrivains du XVI<sup>e</sup> siècle sur les changes", *Rev. écon. intern.*, 20, 1928, fasc. 4.
- (20) この断言は、すでに引用した聖レイの支払委託書についてのセユーの論文の補遺に公表されたただひとつの契約(N<sup>o</sup>. 19, pp. 302~303) に基いている。資料の原文によると、ジェノヴァに住むバプシェンツァの銀行家がいくらかの猶予の後、ラニーの次の大市でリーフル・ツルノワ貨で支払われる支払委託書に、ジェノヴァ貨幣である金額を与えている。もし支払委託書が支払われない場合には、前資金は貸し手に返済されることになっている。したがって、それは手形割引取引ではなく、期限付の爲替取引である。この点について原文はまったく明白である。なぜなら、それは契約が爲替の名のもとに (nomine cambii) 結ばれていると語っているからである。にもかかわらず、セユーは、我々がここに「爲替手形割引の純粹で明白な事例」をもつて、權威をもつて断言している ("La capitalisme commercial et financier dans les pays chrétiens de la Méditerranée occidentale depuis la première croisade jusqu'à la fin du moyen-âge", *Vierteljahrsschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, 29, 1936, S. 281)。
- (21) André-E. Sayous, "L'histoire universelle du droit commercial de Levin Goldschmidt et les méthodes commerciales des pays chrétiens de la Méditerranée aux XII<sup>e</sup> et XIII<sup>e</sup> siècles", *Annales de droit comm. fr., étr., intern.*, 40, 1931, p. 316.

- (22) Id., "Les méthodes commerciales de Barcelone au XV<sup>e</sup> siècle...", p. 275. 前出'注(17)参照。
- (23) Abbott-Payson Usher, *The Early History of Deposit Banking in Mediterranean Europe*, Cambridge (Massachusetts) 1943, vol. 1 (Harvard Economic Studies, Vol. 75).
- (24) 「割引は、流通性原理が確立するまでは発展するゝとがでなかつた」(*Ibid.*, p. 26.)。
- (25) *Ibid.*, pp. 8-9.
- (26) この点は、拙著 *Medici Bank*, New York 1948 の中で誤つて断定したことに反する。この訂正は、誰れもその存在を想像もしなかつた新しい資料、特に貸借対照表に基いている。近いうちに訂正を公表するつもりである。
- (27) A. P. Usher, *op. cit.*, p. 78. 教授は「利付貸借は、幾分、純法律上の違犯である」と主張している。たしかにそうであるが、しかし、いかなる意味においてであらうか。

### 三 為替手形発達の諸段階

そして、われわれが考察しようとしているのは、この道である。

本研究において、われわれは、信用と資金移転の手段である為替手形の歴史に関してアッシャー教授によつて粗削りに仕上げられた研究を、ただ発展させ、完成させることを望んでいる。われわれもまた、法律上の問題にぶつかるであらう。しかし、それについては、われわれは、本書の課題に直接かわるかぎりにおいてのみ取り扱うであらう。別言すれば、手形が支払われず、訴訟に到つた時に生じることは、特別にわれわれの興味をひかない。反対に、われわれをとらえるのは、取引の通常の過程での手形にかかわる慣行である。数世紀にもわたつて為替手形は、銀行家が商人に短期の信用を与えるために好んで用いた道具であつた。したがつて、その発展を考察するにあつては、貨幣市場のメカニズムと構造を考慮することが胆要である。それこそがまさに胆心な点である。この点に関する最良の情報源は、マーチャント・バンカーの帳簿そのものや、ヨーロッパのあらゆる市場の慣習を叙述し

た商人必携（一四世紀以降のものが残存している）である。それから何らの着想をうることもなく、そこからの情報が歴史的価値を何らもたないと考えたのは、大きな誤りであった。

その上、われわれのみることでできた個人的資料は、プラートのダチニ古文書館、フィレンツェ国立古文書館、アントワープ市立古文書館にある一連の為替手形である。これらの為替手形は、一四世紀末から一八世紀末までの時代をいわば切れ目なしにカバーしている。

かくして、われわれは、為替手形の長期の発達過程を確実に考察することができるのである。

四つ、あるいは恐らく五つの時期に分けられるであろう。第一は為替手形の生成の時期である。ローマ法には知られていない新種の契約が、入念に、しかし非常に長くかかって作り上げられた。それが為替契約であつて、その存在は、はじめ公正証書によって確かめられていた。この第一の時期は、およそ一二七五年ないし一三五〇年の間に終了する。<sup>38</sup>

第二の時期に、公正証書は、商人が外地のコレレス先宛に出された急送商用状にとってかわられた。そして、この書状は、為替契約の証拠書類であり、またその契約を履行する書類であるという性格をもっており、まさにここから「為替」に関する書状 (*lettre de change*) なる名前が生れたのである。<sup>39</sup>

第三期は、裏書が商慣習の中に導入され、一般化された一六世紀末頃にはじまる。このイノベーションは、為替手形の性格の完全な転換を引きおこし、為替手形は、為替契約とのあらゆるつながりを徐々に失うことになる。後にも見るように、この発展はヨーロッパ大陸におけるよりもイングランドにおいてより急速にひろまり、いたる所で為替手形を譲渡可能な、割引証券へと転態させた。この帰結に終局的に到るのは一九世紀直前であつた。<sup>40</sup>

かくて、第四期が始まる。為替手形は非常にあつかいやすい信用の道具となり、非常に多様な状況に適應することとなる。あらゆる国々で預金・割引銀行の成長がみられる。しばしば再割引が発券銀行の主要な機能のひとつと

みなされた。

第五の時期は現在にあたる。為替手形は、目下、衰退しつつある。その使用はますます外国貿易に限られつつある。預金銀行は、彼等の顧客の手形を割引くかわりに、当座勘定で貸付を行う<sup>(4)</sup>。発券銀行について言えば、法律上はともかく事実上、政府機関となっており、その主要な機能は、対政府貸付と引き換えに紙券通貨や銀行預金を創造することからなっている。

しかし、われわれは、これら発達の最初から最後まで興味をもっているのではない。本書は、為替手形やそれに等しい証書が何よりも為替契約を証明し、履行する役割を担った最初の三つの時期を取り扱う。残りの二つの時期は、現代のことであり、完全に知られている。陳腐なことをまた始めることにしかならない研究は、行う必要もなからう。

(28) A・ラッテス (Alessandro Lattes) は、生成期を省略して「三つの時期しか考えていない」。A. Lattes, "Genova nella storia del diritto cambiario italiano", *Rivista del diritto commerciale*, 13, fasc. I, 1915, p. 185.

(29) Goldschmidt, *Universalschule*, S. 446. Mario Casanova, art. Cambiale, *Enciclopedia italiana*, 8, 1930, p. 499. Raphaeli de Turri, *Tractatus de cambis*, Frankfurt am Main 1645, disp. 2, quest. 1, § 8, p. 106; Dantur litterae in probationem et executionem contractus Cambii. Cf. Gennairo Mondaini, *Moneta, Credito, Banche attraverso i tempi*, Roma 1942, p. 115.

(30) Lattes, *Genova nella storia del diritto cambiario*, op. cit., p. 185. ラッテスは、その時点として一八四九年のドイツ法をみている。それは法律家の説明である。事実、その法律は、実際の取引ですくなくとも四半世紀来、行われてきた転換を認めたものにすぎないのである。

(31) B.S. Chleper, *Belgian Banking and Banking Theory*, Washington, D. C., 1943, pp. 176-178. 合衆国においては為替手形すなわち「トレード・アクセプタンス」は、国内取引では決して一般につかわれることはなかった。同様に合衆国では商業手形商会 (commercial paper house) の数や彼等の取引量は、減少しつつあった。しかし一般的傾向が問題である。合衆国では銀行の監督官や調査官達は、当座貸越すなわち当座勘定での前貸を疑念をもってみつめている。大部分の貸付は、指図人払の手形すなわち「約束手形」にもとづいてなされており、割引料をさし引いたあとのその純手取額は、顧客の貸方に記入される。



アメリカ人の著者が「当座貸越」という言葉をつかう時、セユーが誤つて考えていたように、彼等はそれを「手形の振出」と考へない。André-E. Sayous, op. cit. *Annales d'histoire écon. et sociale*, 5, 1933, p. 499.

#### 四 為替契約と利子 (usure) に関する教会の教義

序章を今しばらくつづけよう。為替手形史において徴利をめぐるローマ・カトリック教会の教義は、非常に重要な役割を演じた。本書のはじめにこの点の意義を強調してもしすぎるということはあるまい。実際、利付貸借を禁止したカノン準則が効力をもっているかぎり、商業手形の割引は非法法であった。しかし、教会は為替取引を非難することはなかった。<sup>(32)</sup> この事態を説明するためには、為替契約に関するスコラ哲学や決疑論の諸理論の簡潔な説明が不可欠である。

「博士衆」によれば、利子とは彼等がつかう用語では、消費貸借 (mutuum) によつて元金のほかに何らかのものを要求することから成つていた。<sup>(33)</sup> その結果、貸借は何はともあれ絶対に無償契約であるということになった。無償でなくなれば、それは事実それ自身によつて利付契約ということになつていた。<sup>(34)</sup> 定義により純粹で單純な貸借であれ、別の契約の形をとつた隠蔽された貸借であれ、貸借の中にしか利子は存在しえなかつた。当時、後者の貸借は「偽瞞の利付 (in fraudem usurarii)」契約とされていた。前の場合には利子は明白であり、後の場合には利子は隠蔽されていた。<sup>(35)</sup>

利付貸借以外に、例えば独占のごとき他の契約も、利子を生まないにしても非法法であつた。公衆を収奪したり、交換の公正を犯すことによつて実現される利益は、「醜い利益 (turpe lucrum)」の名で呼ばれていた。利子も「醜い利益」も返却されねばならなかつたが、しかし、両者の間にはひとつの違いがあつた。原則的には利子は被害者

である借手に返却されるが、醜い利益は慈善に寄付を行うことで償われえたのである。<sup>36)</sup>

利子と「醜い利益」や公然たる利子と隠された利子とのこれらの区別のほかに、博士衆は秘密の利子と明白な利子との間にいまひとつ別な区別をなしていた。第一の利子は告解の領域に属するが、第二の利子は周知のものとなると教会の裁判やさらに教区付の裁判所で罰せられた。公然たる徴利者に対しては、生前に利子の償還を申し出ないかぎり、教会は、告白と聖体拝領及び清められた大地への埋葬を拒否していた。聖典範によれば、罪を犯しながら公然と暮している周知の徴利者は、破門され、社会から追放された。これが、例えば誰かれなしに質を取って金を貸していた「質屋」のみじめな状況であった。

「博士衆」のほぼ一致した見解によると、われわれが以下で定義を与えようとしている為替契約は、利子とかわりがなかった。なぜならば利子は、真の、あるいは偽装された貸付の中にしか入りこみえないからであった。<sup>37)</sup> 実際、「博士衆」達は、為替契約の本質について意見の一致をみることはなかった。ある者は為替契約を「両替」(*permutatio pecuniae*)とみなしていたし、他の者は一種の「売買」(*emptio venditio*)とみていた。さらに他の者はローマ法に未知の「特別種の (*sui generis*)」契約とみていた。いずれにしても重要な点は、真正の、善意で契約された一地から他地への為替は、貸借ではないということである（「為替は貸借にあらず (*canbium non est mutuum*)」)。ただ乾燥為替や擬制為替はこのかぎりではなかった。なぜならば「博士衆」は、当然、それらの為替契約を偽装された貸借すなわち「欺瞞的徴利」(*in fraudam usuraum*) 契約とみなしていた——これはフィレンツェの大神教、聖アントーニン（一三八九—一四五九年）によって最初にのべられた——。

さしあたり「博士衆」のこの理屈が正しいのか、そうでないのかは問題ではない。はっきりしたことは以下の事実である。すなわち、「博士衆」に正当と認められることによって、為替契約は、銀行家達に教会の制裁をこうむらせることや、利子付で公然と貸付けていたすべての者にのしかかっていた明白な利子の告発にさらさせることもな

いまに、彼等の貨幣に果実を实らせる手段を提供していたということである。明らかに手形を割引くよりも類似の取引を為替取引に偽装することの方がはるかにやりやすく、簡単である。銀行家達が宗教上の戒律に従うというだけの目的で、このごまかしに、それも完全に正当なごまかしに頼ったということは、懐疑的な人々にとっては恐らく奇妙なことに思われるであろう。しかし事實はそうなのである。明白な事實は認めねばならない。メディチ家やその他のマーチャント・バンカーの会計帳簿は、いかなる割引の形跡も残していない。為替取引にかかわる数千の勘定記入がみられるが、そこでは地と貨幣の相違が厳格に守られており、それらは決してうわべだけのものではなかったのである。

かくして、すべての道具立てはしかるべき場所にととのえられていたのであって、それが何であるか、そしてさらに何がかくされているのかをよりよく理解しようとする前に、その起源や根拠を知っておかなければならない。

(32) その証拠として以下の著書の原文を示しておく。"Se alcuno dà a cambio, a dirttura a tanto il mese, o per altro tempo, questo non è cambio, ma prestanza ad usura……" ("もし誰かがはつきりと月いくらか、あるいは別の期限でいくらかの率で為替と引換えに貨幣を手渡すのであれば、それは為替ではなく、邪利息の貸付である")。Giovanni Domenico Peri, *Il negoziante*, Venezia 1707, 1<sup>re</sup> partie, chapitre 29, p. 70. ベリの著書の第一版は一六三八年に出版されている。Cf. "Ergo sicut est prohibitum mutuum : in quo aliquid ratione temporis accipitur ultra sortem quia tunc continet usuram quae omni jure est prohibita, ita etiam prohibitum est cambium, in quo ratione temporis accipitur aliquid ultra summam datam" ("期間を理由に元金のほかに何かを受け取る貸付は、すべての法により禁じられている邪利息を含んでいるが故に禁じられているように、それと同じく、期間を理由に元金のほかに何かを得る為替も禁じられている")。Sigismondo Scaccia, *Tractatus de commerciis et cambio*, Venezia 1669, § 1, quaestio 7, par. 1, no. 25, p. 127.

(33) "Usura est pretium pro usu pecuniae mutuatae" ("邪利息は、貸付けられる貨幣の値段である")。Saint Thomas d'Aquin, *Summa Theologiae* 2, 2, p. 78, art. 1. 他の博士衆にちがつて与えられている定義は、すべてこれに一致している。例えばレッシウスは邪利息を「貸付から直接に生じるもの」(lucrum immediate ex mutuo proveniens)と定義している (Leonardus Lessius, *De iustitia et jure*, libri 2, cap. 20, dub. 3, § 18)。

(34) T. P. McLaughlin, "The Teachings of Canonists on Usury", *Medieval Studies*, 1, 1939, p. 101.

(35) "Unde licet omnis usura versetur in solo contractu mutui, tamen quia contractus mutui est duplex, verus et palliatus ita etiam duplex est usura: vera scilicet, quae consistit in vero mutuo, et palliata, quae versatur in mutuo palliato". (「だから、すべての邪利息は、ただ貸付契約とのみ関係しているのであるが、しかしながら、貸付契約は、純粋なものと糊塗されたものとの二つがある。それと同じように邪利息も二つある。ひとつは純粋なもので、純粋な貸付から生じ、糊塗された邪利息は、糊塗された貸付に関係する」)。Scaccia, *Tractatus de commerciis et cambio*, § 1, quaestio 7, par. 1 no. 25, p. 127.

(36) 一二三八年に死んだ聖レーモン・ドゥ・ベニャフォールに依る。その後、この原理はすべての「博士衆」によって受け入れられた(T. P. McLaughlin, op. cit., p. 125)。われわれはこれらの記述や書物の照会に関して、利子や返却の問題の専門家であるわれわれの友人B・N・ネルソン(Benjamin N. Nelson)に負っている。

(37) Jacques du Puy, *L'art des lettres de change*, Paris 1693, chap. 2, § 9, pp. 12-13. Cf. Hieronymus de Luca, O.S.B.V.M., "De cambiis", *Tractatus universi juris*, tome VI, 1<sup>re</sup> partie, Venezia 1584, cap. 4, no. 48, f<sup>o</sup> 410 V: "Omnes doctores communiter tenent que solum in contractu mutui habet locum usura, si ibi fuerit lucrum" (「すべての博士衆が、もうけを生むなら、貸付契約だけに邪利息があると考へてゐる」)。Laurentius de Rodulphis [de Ridolfi], "De usuris", *ibid.*, t. VII, Venezia 1584, 3<sup>e</sup> partie, § 9, f<sup>o</sup> 38 r. ".....solum in contractu mutui cadit usura". (「邪利息はただ貸付契約だけから生じる」)。この論説の日付は一四〇三年で、体系的に為替を取りあつた最初のものである。

## 第一章 一四世紀における起源

### 一 ジェノヴァ等における銀行と為替の生成

セユーによれば、銀行業務の起点は貸付にもとめられる。「銀行のやり方が明らかにするのは、ほとんどその貸付が返済される時でしかない。それに為替取引が付け加えられるのである」<sup>1</sup>と。われわれの見解では事実とは逆であ

る。銀行は本質的に信用機関であるけれども、その起源は貸付 (credit) ではなく、為替 (change) の中に求めなければならぬ。当然、貸付業務は、言わば、その発端から為替業務に結合されていた。しかしながら、後者の為替業務が決定的要因であったと思われる。<sup>2)</sup>

諸資料は、銀行業の起源についての解りにくい問題にいくらかの光を投げかけているが、為替手形取引が国際商業に根ざしているのに対して、預金振替銀行が単なる両替に由来しているという印象を与える。為替取引を行っていた人々は、最初、ただ商人と呼ばれていた。ジェノヴァや沿海都市では銀行家という用語は、テーブルすなわち両替のテーブルをもつ両替商を意味していた。その後、銀行家という名称は、質屋も入れ、貨幣をとりあつかうすべての者を区別なく、示すこととなった。一四、五世紀のフィレンツェではこのようであった。そして、ついに一七、八世紀になると大陸では銀行家という名称は、次第にただ為替業者だけに、すなわち両替商や秘密の、あるいは公然たる徴利者をのぞいて為替手形をとりあつかう者だけに与えられた——イングランドではそうではなかった。

両替業者の活動について、そのもつとも古い資料は、その最初の記録が一二世紀に遡るジェノヴァの公証人の略註 (les notules) である。これらの資料を検討すると、ジェノヴァの両替商が当初、貨幣の両替をもつぱら行っていたが、要求払預金を受け入れ、顧客の指図に従って勘定振替によって決済し、ついには当座勘定で顧客に前貸することによって彼等の活動領域を早くから広げていたことが比類のないほどに明らかになる。かくて両替業務のテーブルすなわち事務所は、徐々に預金振替銀行となった。<sup>3)</sup> ジェノヴァでのこの発展は、一二世紀末以前に完成される。その否定しえない証拠は、一二〇〇年になされた訴訟書類にみられる。<sup>4)</sup> 証人の訊問によれば、ジェノヴァには債務者と債権者が別々の両替業者のもとに口座をもっている場合にすら、振替による支払を認める相殺での決済システムが存在していた。

公証人の略註は、また一二世紀のジェノヴァの銀行家——恐らく両替業者のことであろうが、公正証書は彼等に「銀行家 (bancherius)」という職業的名称を与えている——が、組合契約を結び、信用を与え、利子支払いや利潤への予想される参加を引き起こす定期預金を受けとつていたことを示している。<sup>(5)</sup> しかしながら、外国貿易におけるこれら銀行家の役割は、かなり控え目なものであった。<sup>(6)</sup> ディ・ツッチ (Di Tucci) によつて公表された五三件の資料のうち、隔地間為替にかかわるものは、三件のみであった。<sup>(7)</sup>

この領域においては、取引が地方的枠から離れることのない両替業者よりも、むしろ取引が国際的性格をもつていた商人がイニシアティブをとっている。<sup>(8)</sup> したがつて、「為替証書 (cambium per litteras)」あるいは為替手形取引の起源を「貨幣の単なる両替 (cambium minutum)」に求めることは大いに疑わしい。<sup>(9)</sup>

マルセーユにおけると同様にジェノヴァにおいて、一三世紀以降、主要な金貨としてあらわれ、シャンパーニュ大市やその他の大市で支払われる債務証書を引受けて、他の商人達を金融したのは、内陸の諸都市から来たマーチャント・バンカー（とくにピアツェンツァやさらにシエーナやフィレンツェの人々）である。<sup>(10)</sup> すでにこれら銀行は、その組織を数ヶ国に広げている同族的な、恒久的な企業に属していた。<sup>(11)</sup> これらのうちから一四世紀以降、商品取引と為替取引を併せ行う強力な商業・銀行商會が出現した。<sup>(12)</sup> 一六世紀やそれ以降においてすら、この結合は例外であるよりもむしろ一般的であった。<sup>(13)</sup> 銀行家でしかない銀行家というのは、アンシャン・レジームの終りまではまれであった。

ブリュージュでは一世紀遅れて、ジェノヴァと同様な発展がみられた。<sup>(14)</sup> 一四世紀以降、両替業者の事務所は、バルセロナ、ミラノ、ピアツェンツァ、リエージュ、シュトラスブルグ、さらにはコンスタンチノーブルにおいてすら、ほぼあらゆる所でその地の預金・振替銀行に転換することとなった。<sup>(15)</sup> あらゆる所でマーチャント・バンカーは、為替手形取引を事実上、独占していた。例外はただフィレンツェと恐らくヴェネチアだけであろう。そこでは両替

業者と為替業者との境界は、はっきりときめられてはいなかった。

どこでも為替は銀行と結合したままであった。中世においては銀行取引を行うこと (fare il banco) と為替取引を行うこと (fare il cambio) とは、表現が違っても同じ意味であった。フィレンツェでは銀行家のギルドは、「為替ギルド」(Arte del Cambio) を意味する名称をもっていた。用語は、他の領域におけるように経済の現実をたびたびよく写し出すものである。この点を何ら考慮しないことは誤りであろう。

- (1) André-E. Sayous, "Les opérations des banquiers italiens en Italie et aux foires de Champagne pendant le XIII<sup>e</sup> siècle," *Rev. hist.*, 170, 1932, p. 6.

- (2) M. W. W. の見解と同様である。Margaret Winslow Hall, "Early Bankers in the Genoese Notarial Records," *The Economic History Review*, 6, 1935, pp. 73-79. ハルは、この見解を表明してセノーの怒りを招くことになった。彼女の論説はきびしい論争の出発点を画することとなった。その中でセノーは「E. H. ユルヌ (Eugène H. Byrne) との一派を不当に」しはし理由もなくまことに攻撃した。André-E. Sayous, "Les travaux des Américains sur le commerce de Gènes aux XII<sup>e</sup> et XIII<sup>e</sup> siècles," *Giornale storico e letterario della Liguria*, 13, 1937, pp. 81-89; Robert L. Reynolds, "Gli studi americani sulla storia genovese (Risposta a A. E. Sayous)," *ibid.*, 14, 1938, pp. 1-27. この論争はさういふはわれわれはセノーの側につくよりむしろレイノルズやハルの側に従う。なかなかセノーは「職業的名称として」「Banckerius」という名称をつかったことで「ハル＝コール夫人やディ・ツッチ (Di Tucci) を咎めている。この非難は容認されない。なぜならば、原文は「banckerius」という語に銀行がこつていさうを示唆しているからである。

- (3) Hall, *op. cit.*, p. 79.
- (4) Robert L. Reynolds, "A Business Affair in Genoa in the Year 1200. Banking, Bookkeeping, a Broker (?), and a Lawsuit," *Studi di storia e diritto in onore di Enrico Besta*, Milano 1938, II, pp. 167-181. 十三世紀はさういふセノーの行政長官の法規は「銀行の勘定記入による支払を有効と認めていた。別な法令は、両替銀行家の帳簿が裁判証拠になると規定している。また銀行帳簿の語句の削除は厳しく禁じられていた。Raffaele Di Tucci, *Studi sull'economia genovese del secolo decimo-secondo: la nave e i contratti marittimi, la banca privata*, Torino 1933, p. 117, pp. 126-127.
- (5) Di Tucci, *op. cit.*, pp. 81-117. 時には預金者の取り分の決定は「もし神が利益をお与えになるならば、銀行家の中から

預金者にふさわしいと考えるだけを与えるであらうと契約している一一九〇年の契約におけるように、銀行家の「意向」にまかなれていた (*ibid.*, doc. No. II, p. 90)。M・キアウダーノ (Mario Chiadano) は、一一八六年一月二四日付のものであるが、公証人オベルト・スクリーバ・デ・メルカート (Oberto Scriba de Mercato) の略註から同様な契約を公表した (M. Chiadano, *Documenti e studi per la storia del commercio e del diritto commerciale italiano*, tome XVI, Torino 1940, p. 106, No. 285)。

(9) Hall, *op. cit.*, p. 79. 「彼等 (銀行業者) は、商工業の金融や外国為替においてただ非常に小さな役割しか演じていなかった」。

(7) Di Tucci, *op. cit.*, p. 104 (No. 30, 31), p. 116 (No. 53). Cf. André-E. Sayous, "Les opérations des banquiers de Gênes à la fin du XII<sup>e</sup> siècle," *Annales de droit comm. fr., étr. et intern.*, 43, 1934, pp. 285-296. ヤノーとは並び「われわれはデイ・シツチによって公表された資料が「平凡な意義しか」(*ibid.*, p. 294) もつていないとは考えない。恐らくデイ・シツチはそれらを活用することを知らなかったのであらうが、それら資料はより仔細に研究される値打ちのあるものである。

(8) これは「一三世紀のマルセーユの公証人アマリック (Amalric) の証書類の検討の後、A・シャウベが到達した結論である (A. Schaube, *op. cit.*, S. 165)。

(9) A. Schaube, "Einige Beobachtungen……", *op. cit.*, S. 134-135.

(10) Sayous, "Le capitalisme commercial et financier", *op. cit.*, p. 276 et suiv.

(11) Yves Renouard, *Les hommes d'affaires italiens du moyen âge*, Paris 1949, p. 64 et suiv.

(12) やらに同じ著者による別の書物のこの問題についての素晴らしい章を参照された。Y. Renouard, *Les relations des Papes d'Avignon et des compagnies commerciales et bancaires de 1316 à 1378*, Paris 1941 (la Bibliothèque des Ecoles françaises d'Athènes et de Rome, No. 51) pp. 40-85.

(13) 当時の最大の二商会だけを引用しておく、それはとくに一五世紀のメジチ家と一六世紀のフッガー家である。Cf. N. S. B. Gras, *Business and Capitalism*, New York 1939, pp. 77, 141-151. 植村元寛訳「ビジネスと資本主義——経営史序説——」日本経済評論社、昭和五五年、一六四—一八一頁。

(14) Raymond de Roover, *Money, Banking and Credit in Mediaeval Bruges*, Cambridge Mass. 1948 (The Mediaeval Academy of America, Publ. No. 51), p. 202 et suiv.

(15) コンスタンチノーブルに振替銀行が存在したという証拠は「J・バドエル (Jacopo Badoer) の元帳 (一四三六—三九年)



での数多くの記述によって与えられている (Venezia, Archivio di Stato, Archivio dei Cinque Savi alla Mercanzia, Busta 958)° Cf. Fabio Besta, *La Ragioneria*, 3<sup>a</sup> ed. Milano 1922, t. 3, p. 313. 「バドエルの帳簿の原文は、U・ドリーニ (Umberto Dorini) によってすべて書き写され、目下、印刷中である。

## 二 ジェノヴァの公証人の略註による初期の為替契約

これまでみてきたように、為替手形の起源問題は、A・セユーや、彼以前にはA・シャウベによって明解に研究されてきた。両者は、ふたつとない貴重な資料であるマルセユーの公証人アマリクの公正証書（一二四八年）や一二、三世紀のジェノヴァの公証人の略註を利用した。最近までこれら略註のほんの一部すらも公表されることはなかった。今、われわれはいくつかの公正証書原本綴の完全な原文、とりわけ、ジョバンニ・スクリーバ (Giovanni Scriba 一一五五—一一六四年)、オベルト・スクリーバ・デ・メルカート (Oberto Scriba de Mercato 一一八六年と一一九〇年)、グリエルモ・カッシネーゼ (Guglino Cassiness 一一九〇—一一九二年)、ボンヴィラーノ (Bonvillano 一一九八年)、ジョバンニ・ディ・ギベルト (Giovanni di Giberto 一二〇〇—一二三一年) の公正証書をもっている。<sup>19)</sup> つづいてR・ドゥエール (René Doeherd) 女史は、ジェノヴァとアルプスの北方との商業にかかわる一二〇〇年以降の公正証書の抜萃された資料集を公表し、歴史家に貴重な貢献をなした。<sup>17)</sup> これらの資料は、一三世紀全体と一四世紀の第I四半期をカバーしているだけにますます有用である。まさにこの時期は、為替手形の起源にとって決定的な時期である。

新資料の非常に豊かな収穫を得て、今一度、セユーが投げ棄てた点にまで問題をさかのぼって論じることが、向こう見ずでも、ましてや無駄でもない。時期的にもっとも早いG・スクリーバの原本綴における数多くの証書は、

海上貸付と会社設立にかかわるもので、そこには隔地間為替にかかわる契約は、ほとんどみられない。隔地間為替契約がみられない理由は、セユーによつて十分に考察された。<sup>18</sup>一二世紀には外国との商業組織は、いまだ全く未発達であつた。一般に会社はただ往復の一回かぎりの船海のためにだけ形成されるにすぎなかつた。陸路によれ海路によれ、商人達はいまだ自ら荷を携行していた。彼等が自国から持ち出す諸商品は、彼等が持ち帰る物品を買うのに役立つていた。換言すれば、輸入はびつたりと輸出に結びついていた。このような条件のもとでは、隔地間為替の問題は生じようがなく、ただ例外的な場合にのみ問題になつたにすぎない。したがつて、何ら驚くべきことでもないが、ジェノヴァの公正証書原本の中には初めてのうち為替取引に関する契約は、まれにしかみられなかつたが、その後、次第に多くなり、日常的事項となつたのは一三世紀中葉頃に過ぎない。セユーによると、この変化は、輸出入活動が増加し複雑となり、両者がますます頻繁に分離されたことから生じた。<sup>19</sup>これに加えて、資金の主要な貸し手たる大商人達がますます外地に常置的代理人をもつようになつたことであろう。この後者の事態の進展は、とくにシャンパーニュ大市との陸路による貿易に影響を与えた。その後も長きにわたつて、一時的な組合という古い制度が奇妙にもレヴァントとの海上貿易に残つた。

かくして、ジョンバンニ・スクリーバの依頼者が主に商人や船主から成つてはいたが、彼の証書原本綴には為替取引にかかわる契約は、まったくわずかしが含まれていなかったのである。<sup>20</sup>しかしながら、それらのうちの以下の例外はすこぶる興味深い。実際、それは将来流布する慣行となるものを既に予期せしめるものである。一一五六年六月八日付のこの公正証書によれば、ライモンド (Raimondo) とリバルド (Ribaldo) の二兄弟は、リバルド・ボレート (Ribaldo Boletto) からジェノヴァ貨で一五リブルを受領したことを認め、コンスタンチノーブル到着一ヶ月後にその対価四六〇ビザンチウムを、すなわちたとえ他の都市でたてられたものであらうと皇帝の相場で返済する旨を約束している。<sup>21</sup>このことから一ビザンチウムはジェノヴァ貨で五スーに等しいことになる。同じことだ

が、ジェノヴァ貨一リーブルは、四ビザンチウムにあたる。さらにこの契約は、予定された返済がここで行われな  
いならば、債権者が万聖節（十一月一日）にレヴァントで五〇〇ビザンチウム支払われる旨を定めている。そして  
さらには債務者がこの十一月一日にさえ返済しないのであれば、債務者は翌年の八月一日以前に、もはやコンスタ  
ンチノープルではなくジェノヴァで一ビザンチウムにつきジェノヴァ貨一〇スーの相場で債権者に支払わなければ  
ならないことになっていた。換言すれば、支払期日が延長される場合には、債権者はジェノヴァ貨で二五〇リーブ  
ル受領することになる。その場合、債務額は一四か月で二倍以上となろう。そして、この契約の良き履行につきア  
ミーコ・グリッロ (Amico Grillo) なるものがいわばこの約束を保証していることを付記しておこう。<sup>23</sup> 恐らく支払  
延期の場合には、為替相場はコンスタンチノープルで債務者に債務を決済させるように仕向けるために不利になっ  
ていた。しかし、この契約は、利子や、あるいは、海上為替のように債権者によって担われるリスクを償う代償  
を含めるような方法でこの相場をあやつることがすでに容易かということを示している。G・スクリー  
バによって作成された別の公正証書は、恐らくサレルノのユダヤ人ソリマン (Soliman) と同一人物と見られるソリ  
マーノ (Solimano) なる者と息子が、当時アレキサンドリアにいたオゲリオ・ヴェント (Ogerio Vento) との間に  
結ばれた一一五六年八月二〇日の契約にかかわる。<sup>23</sup> ソリマーノは、エジプトに向けて出発するにあたって、ヴェン  
トの息子にジェノヴァ貨一リーブルにつき二・七五ビザンチウムの比率で、一五リーブルの対価を送金する義務を  
負い、さらにその上、彼に手網のついた銀製の轡<sup>くわ</sup>と一〇ポンド二オンスのサフランを送付することを約束している。<sup>24</sup>  
この取引の例外的な性格は、一目瞭然である。恐らくこの取引は、O・ヴェントの息子に資金と各種の品物をとど  
けることをその基本的目的としており、ただそれに付随して信用取引が問題になっているだけである。

為替取引にかかわる契約は、公証人オベルト・スクリーバ・デ・メルカートの公正証書の中にわずかであるがみ  
られる。その最初の原本綴は、ジョバンニ・スクリーバのそれに一五年遅れる（一一八六年）。しかし、ソキエテ契

約や海上貸付はいつも目につく。<sup>(25)</sup> 一層興味深い契約のひとつは、二名のローマ人と二名のルッカ人との間で一一八六年一月一三日にジェノヴァで結ばれた為替にかかわる。ローマ人達は、ジェノヴァのデナリウス貨である金額を受領した旨を認め、謝肉祭の前にパリで英古貨四マルク半の返済を、またそれができない場合には、その後、復活祭の前にローマで五マルクを返済することを連帯して誓約している。誓約は、福音書に手をのせて公式になされた。<sup>(26)</sup>

グリエルモ・カッシネーゼの公正証書原本綴(一一九〇―一一九二年)の中の為替契約は、一般にジェノヴァでジェノヴァ貨で貸付けられ、つぎのシャンパーニュ大市でプロヴァンの貨幣、すなわちプロヴィノワ貨で返済される前貸に関連している。<sup>(27)</sup> 往々に契約は、もし予定の支払いが行われないならば、大市に参加した商人が隊商とともにジェノヴァに戻ってから債務が支払われ旨を取り決めている。その場合、契約は、プロヴァン貨のジェノヴァ貨への再転換の比率を前もって決めていた。<sup>(28)</sup> それがすでに為替と戻し為替であることは明きらかである。

同種の契約は、聖職者であり、後にはベネディクト修道会の後継者となった公証人ジョバンニ・ディ・ギベルトの証書原本綴(二〇〇―二二一年)の中に数多くみられる。債務はシャンパーニュ大市で返済されないで、往々パヴィアやあるいはミラーノで返済されている。これらの都市はミラーノの近隣にあるので、債務者に与えられた猶予は一五日間になっている。<sup>(29)</sup>

公証人ジョバンニ・ディ・ギベルトの略註には、契約は一般に「貸借 (mutuum)」と書かれているが、「為替を理由に (nomine cambii)」して結ばれている。<sup>(30)</sup> だがそれが不都合な表現であったことを認めねばならない。「貸借 (mutuum)」なる語は、あたかも赤い布が牡牛をひきつけるように神学者の注意をひかざるをえなかった。商人達は、為替契約が付随的に貸付であるにすぎず、その肝心な目的が資金の移転であるということを「博士衆」に信じさせようとしていた。そして「貸借」をはのめかすものを一切、排除するために、「為替を理由とする貸借 (mutuo

nomine cambii)」という表現は、ジェノヴァの公証人の用語から急速に姿を消し、「為替を原因として (ex causa cambii)」やあるいは「為替また売却を理由として (nomine cambii vel vendicionis)」にとつてかわられたことは、<sup>(31)</sup> 少しも驚くにあたらない。マルセーユの公証人アマルリクの契約で好んで用いられた表現は、「交換または為替を原因として (ex causa permutacionis seu cambii)」である。<sup>(32)</sup> これらの新しい表現は、神学者の疑惑を招くこともなく、そして為替契約を「(外貨と邦貨の——訳者) 交換 (permutatio)」あるいは「売買 (emptio venditio)」ととらえようと考えていた法学者にも好都合でもあった。

- (16) F. パテッタ (Federico Patetta) と M. キアウダーノ (Mario Chiadano) によつて監修された以下の資料におきめられよう。*Documenti e Studi per la storia del commercio e del diritto commerciale italiano.*
- (17) Renée Doehaerd, *Les relations commerciales entre Gênes, la Belgique et l'Outremer, d'après les archives notariales génoises aux XIII<sup>e</sup> et XIV<sup>e</sup> siècles* (Institut historique belge de Rome, études d'histoire économique et sociale, t. II, III, et IV, Bruxelles, 1941), 3 tomes.
- (18) Sayous, "L'origine de la lettre de change," *op. cit.*, p. 70 et suiv.
- (19) *Ibid.*, p. 84, p. 94.
- (20) Mario Chiadano et Mattia Moresco, *Il cartolare de Giovanni Scriba*, Torino 1935 (*Documenti e studi per la storia del commercio e del diritto commerciale italiano*, tomes I et II), Nos. 84, 117, 243, 658, 663, 666, 676, 945, 1097. 契約の大部分は、なお海上為替で、その返済は、船舶か船荷の無事に到着次第であった。ジョバンニ・スクリーバの証書原本は、すでに以下のコレクションの第二巻に公表されている。*Historiae Monumenta*, Torino 1853.
- (21) *Ibid.*, ed. Chiadano, I, p. 45, No. 48. コルタシニ・ミットらまた不完全な原文を公表している (*Universgeschichte*, S. 420)。
- (22) この契約は、またセノーによつても取り上げられている (Sayous, "Origine de la lettre de change", pp. 80-82)。<sup>(33)</sup> 彼は、これを海上為替あるいは条件為替であると主張している。しかし、それはまちがいであらう。なぜなら、原文は、はつきりこの貸付が条件なしに (sine periculo) 返済されねばならないと述べているからである。
- (23) Benjamin N. Nelson, "Blancardo (the Jew) of Genoa and the Restitution of Usury in medieval Italy," *Studi in onore di Gino Luzzatto*, Milano 1950, I, p. 98.

- (24) Cart. di Giov. Scriba, tome I, p. 62, No. 117
- (25) Mario Chiaudano, ed., *Oberto Scriba de Mercato* (1186); Chiaudano et Raimondo Morozzo della Rocca, eds., *Oberto Scriba de Mercato* (1190), Torino 1940 et 1938 (tome XVI et XI de *Documenti e studi per la storia del commercio*).
- (26) *Oberto Scriba de Mercato* (1186), pp. 120~121, No. 117.
- (27) Margaret W. Hall, Hilmar C. Krueger, Robert L. Reynolds, eds., *Giulienno Cassinese, 1190~1192*, Torino 1938 (*Documenti e studi*, tomes 12 et 13), Nos. 202, 203, 610 etc.
- (28) *Ibid.* Nos. 760, 776. この相場は「ブローヤン貨」「シュマニヤ貨」である。「スーオタリ」「シェンヴァ貨」が何デニヤになるかで決められていた。
- (29) M. W. Hall-Cole, H. C. Krueger, R. G. Reinert, R. L. Reynolds, *Giovanni di Guiberto, 1200~1211*, Torino 1939~1940 (*Documenti e studi*, .....tome 17 et 18), Nos. 61, 62, 78, 81, 115 etc.
- (30) 例えは *ibid.*, p. 39, No. 81: Confitetur Ablaticus de Sesto se cepisse tot den. jan. mutuo nomine cambii ad Laurentio de Melco (アブラティクス・デ・セストは「ラウレント・デ・メルコ」から為替の各目で貨幣を借り受けた).
- (31) 例えは R. Doehaerd, *Relations commerciales*, t. 3, Nos. 1348, 1503, 1559, 1806 etc.
- (32) Louis Blancard, *Documents inédits sur le commerce de Marseille au moyen-âge: Contrats commerciaux du XIII<sup>e</sup> siècle*, Marseilles 1884, t. 1, p. 302 (No. 100), p. 303 (No. 101), etc.

### 三 為替手形の原型である「為替を原因とする契約証書 (instrumentum ex causa cambii)」

われわれが今、その内容について叙述した公正証書は、当時の用語の中に、ついに「為替を原因とする契約証書」なる術語をもつにいたった。セユーはその重要性を明確に指摘することはなかった。しかし、われわれは、それらを為替手形の原型とみる点において L・ブランカード (Louis Blancard) や L・ゴルトシュミットと意見を同じくしている。それ故、それらを仔細に研究することは意義のあることである。

例えば、ここに公証人 G・カッシネーゼのもとで一二〇六年四月二八日に作成された公正証書がある。<sup>33</sup> ラーンズの E・デ・コジノ (Enrius de Cogino) なる者は、ベルチェッリ (北伊の都市——訳者) のインベルツス・デ・ゴネラとデ・ペルツスからジェノヴァ貨で何デナリ (tot denarius Janue) かを貸付 (mutuo) で、しかし為替を理由として (nomine cambii) 受領した旨を認め、そして次のプロヴァンの大市の際にプロヴァン貨三〇リーブルを、みずから両債権者達にか、あるいは両者中の一名であれ、または両名中の一名の正当な使者にであれ (unde ei vel uni eorum vel certo misso alterius eorum dare promittit)、返済する旨を約束している。<sup>34</sup> そして、もしプロヴァン貨のデニエが重量、品位の低落をみた場合には、債務者は、トロワイエの一マルクあたりプロヴァン貨四ハスーの比率で、別言すれば銀で一二・五マルクを債権者に支払う旨を約束している。債務者は、「金銭不受領 (non nume-rate pecuniae)」の抗弁を放棄し、その上、債務が決められた期日に支払われないならば、債権者が被る一切の費用と損失の賠償をなす旨を約束している。<sup>35</sup> そして最後に、債務者は彼の全財産を担保にして債務の履行を約束している。

基本的な、しかも欠くべからざる第一の問題は、何が問題になるのかということである。われわれは、上記の資料の原文が取引の性格を明らかにしていると考え、それはまさにジェノヴァでなされた資金の貸付と、シャンパーニュ大市での返済ということである。しかしながら、この貸付は、純粹かつ單純な貸借ではなく、為替取引、すなわちジェノヴァ貨のデニエからプロヴァン貨のデニエへの転換を伴い、込み入っている。為替と信用とのこの融合こそがまさに為替契約の主要な特色のひとつである。

一三世紀のはじめ、商人達はいまだ旅商であった。隊商を組み一隊となつて、彼等は商品を積載した駄獸群を率いていた。<sup>36</sup> いま問題にしている事例では、債務者はラーンスの商人で、商用でジェノヴァに来て、それから恐らくシャンパーニュ大市を経由してラーンスに帰るのであろう。そのことは、商品の追加を仕入れることができるよう

に借入を契約したその証書によつて示されている。当該の商人は、プロヴァンの大市での売上金で借入金を返済するつもりで、恐らく諸費用や利子をまかないうる価格の取得を期待していたのであろう。そうでないなら、彼は何故に借入れなどするだろうか。

債権者もまた利益への期待からこの取引を結んだことは確かであらう。この取引は、債務者の破産の危険をおくと、危険のない利益の大きい投資の道を拓いていた。プロヴァン貨の突然の貶質によるあらゆる為替の損失に対してすら、約款が債権者を保護していた。<sup>(37)</sup>これら両債権者は、十中八九おそらく組合員で、両名がともにプロヴァンの大市に赴くのでなければ、一名はジェノヴァに残り、他はプロヴァンの大市で出向いたであらう。もし両名とも大市に出向いていけない場合には、恐らく彼等はシャンパーニュに信頼できる人物をもつていて、そしてその者が彼等の債権を取り立て、そして商品を送付するか、あるいは後に戻為替と称される別な契約を組むかして、ジェノヴァに手形代金を送付する責任を引受けていたであらう。<sup>(38)</sup>

以上、考察したように、われわれが分折した公正証書は、債務者が債権者自身にか、あるいは債権の証書を携さず、支払を受取った後、通常、それを返送する正当な代理人かに支払うことが有効であることを取りきめていた。

このことの結果、他の為替契約には「われはわれにより、またはわれの使者により、汝または汝の正当なる使者へ返済することを約す (per me vel meum missum tibi vel tuo certo missio dare promittit)」なる文言がしばしばみられる。これは誤つて指図人払条項と考えられてきた。L・ゴルトシュミットは、このような証書を「能動的指

図条項及び受動的指図条項が記載された他地払約束手形 (domizlierter Eigenwechsel mit aktiver und passiver Orderklausel)」という名称で呼びさえしている。<sup>(39)</sup>何よりもまず、このような証書は、指図人払約束手形ではない。

それらにはやはり「為替を原因とする契約証書」か公証された為替契約書の名称を与えるのが、一層、慎重で正確である。いわゆる指図人払条項とは何かといえ、それは、債務者あるいはその受任者が債権者あるいはその受任



者から有効に支払われうることを許す文言であった。しかし、さきものは支払の委任にすぎず、それ以上ではない。<sup>40</sup>たとえ債務者が支払を拒否したとしても、上に引用した文言は、証書の持参人にもとの債権者に対して遡及することを認めていなかった。それには新たな権利が必要とされよう。

実際には、善意の債務者は、証書を呈示する者が債権者の一族の者や「組合員 (socius)」やあるいは代理人として商人間で知られている時には、何らの異議をもとなえなかった。そのように債権者の「代理人 (missus)」に支払えることは、「為替を原因とする契約証書」に、シャンパーニュ大市の隊商による取引の要求に驚くほど適応する弾力性を与えていた。

一二〇六年四月二八日付の公正証書は、シャンパーニュ大市で返済される金額については明言しているが、ラーンスの商人に二名のフランドル商人からジェノヴァで貸付られた金額については、何ら明示されていない。恐らく利子が為替の価格の中に含まれていたと思われる。しかし、それはこれまでの所では決定的な証拠にもとづかない仮説にすぎない。

(33) 他の類似した契約の事例が以下にみられる。R. Doehaerd, *Relations commerciales*, op. cit. リストは「為替」という索引項目にみられる。

(34) *Ibid.*, II, 106, doc. No. 221. ベッルスは、別の証書の中ではコルデリウス (Corderius) と呼ばれている (*ibid.*, II, 160, doc. 320)。コルデリウスというのが苗字なのか、それとも職業を示すものなのかを確定することができなかった。インベルツス・ゴネラは多分、呉服商とほかでのべられているインベルツス・デ・ヴェルツェラと同一人物であろう。多分、債権者は両者ともフランドル人と思われる。もちろん Wace 地方の者でガン (Gand) に住む一族であろうと、ドゥエール女史は考えている (*ibid.*, I, pp. 158-159, n.)。

(35) 「金銭不受領 (non numerate pecuniae)」の抗弁とは、契約が利付であり、借り受けた金額よりも大きい金額の債務を債権者に負っていることの立証を、債務者に認めるものであった。

(36) Henri Laurent, *Un grand commerce d'exportation au moyen âge: la draperie des Pays-Bas en France et dans les pays méditerranéens (XII<sup>e</sup>-XV<sup>e</sup> siècles)*, Paris 1935, pp. 244-245; Robert L. Reynolds, "Genoise Trade in the Twelfth Century", *Journal of Economic and Business History*, 3, 1934, pp. 362-381.

(37) この約款は非常によくみられる。公証人 G・カッシネーゼの略註(一一九〇—一一九二年)にいくつかの事例がある(t. I, Nos. 275, 423, 588, 617 etc)。

(38) 「戻為替」という語は、二つの意味をもっている。厳密な意味とより広い意味である。広義においては、戻為替は銀行家が資金を回帰させる (retour) すなわち第一の為替の結果として送付される資金を還流させる単なる第二の為替にすぎない。厳密な意味では、戻為替は同様に第一為替に由来するが、支払がなされない第一為替に由来する。手形代金の受取人は、手形振出人宛に戻為替のための戻手形を振出すことによって償還請求をなすのである。Scaccia, *Tractatus*, § 1, quaest. 4, No. 38, p. 102; J. Phoonsen, *Les Loix et les coutumes du change*, Amsterdam 1715, p. 119 参照。本書では「戻為替」という語は、文脈に従って両方の意味で用いられている。

(39) L. Goldschmidt, *Universalsgeschichte*, S. 419, 433 の用語は、W・エンデマンによって厳しく、かつ正当にも批判された (Wilhelm Endemann, *Studien*, I, S. 95)。<sup>1)</sup> ところが、この用語は、マンリ・ピレンヌ (Henri Pirenne) も含め、多くの歴史家に援用された。後は“Eigenwechsel”や“billet à ordre avec remise de place”と訳出している (H. Pirenne, *Le Mouvement économique et social, extrait de l'Histoire du moyen âge*, tome VIII, Gustave Giotz, ed., Paris 1933, p. 91)。<sup>2)</sup> しかし、公証人の証書は、手形ではないし、「指図人払」という用語は、裏書の存在を前提としている。

(40) その証拠は、R・ドゥエールに公刊された一二五〇年以降の為替契約によって与えられている。これらの契約は、しばしば債権者の使者あるいは代理人 (nuncio seu procuratore) に支払れている。特に「代理人 (procurator)」という語の使用は、何らの疑問も残さない。Renée Doehaerd, op. cit., Nos. 1449, 1503, 1506, 1517, 1559 et passim。ベルセーヌの公証人アマールリクの略註(一二四八年)において、しばしばつかわれているのは、*tivi vel consociis tuis vel cui mandaveris* (「あなたに又はあなたの組合員に、又はあなたの指図する人に」という文言である)。<sup>3)</sup> *mandaveris* という語の使用は、代理人の存在を十分に示唆している。Blancard, ed., *Documents inédits sur le commerce de Marseille*, II, Nos. 375, 396, 498 et passim。

#### 四 ジェノヴァとシャンパーニュ大市間の為替取引——貨幣市場の生成

ゴルトシュミットは、「為替を原因とする契約証書 (instrumentum ex causa cambii)」の買い手が借り手に、す

なわち外地で必要とされる外貨を供給し、正貨を輸送する危険を引受ける売り手に、手数料を支払っていたという奇妙な主張を支持しさえした。<sup>(41)</sup> 彼によれば、銀行家は、主要には証書の売り手であって、報酬を受けることを条件に資金の輸送を引き受けていた。この理論は、完全に役割を転倒させている。<sup>(42)</sup> シャウベの言うのがもつともなように、「為替を原因とする契約証書」は、なによりもまず信用証書であって、副次的に資金移転の証書であった。他地で支払われる約束証を売却して流動資金と入手する外国為替手形の売り手 (Wechselgeber) が、一般に資本を一時的に使わせてもらうために手形の買い手 (Wechselnehmer) に補償金を払込んでおり、さらにゴルトシュミット説とは反対に、正貨の形だけの現送のために手数料などを一切、受取っていないことは、何ら不思議なことではない。<sup>(43)</sup> さらに付言すると、他地に送付されるのは正貨ではなく、通常は商品であって、そこで利益を見込んで売却し、その手取金でもって、借入金返済を行っていたのである。

しかし、シャウベの展開はそこでとまってしまっている。彼の非常に巧みな計算は、隠された利子の存在をよく教えているのであるが、しかし彼は、貨幣市場の秘められた機構を発見していない。数多くの論文の中でセューは、このまさに要めの点をそれ以上に明らかにしているわけでない。すなわち彼は「シャウベは明確にすることができたはずだ」と考え、誤ってそれがすでに割引か、少なくとも何かそれに類似するものであると主張している。<sup>(44)</sup> R・ドゥエール女史について言えば、為替契約が信用取引を伴い、貸し手があれこれの方法で外地で現金化される手形に対する貸付から利子を受けとると強調したことでは賞讃されねばならない。にもかかわらず、彼女は、ある時には利子が為替の価格に含まれていると言っている(これは事実である)、またある時には銀行家が手形割引業務に従事している(これは誤りである)、相矛盾した主張をなしているように思われる。<sup>(45)</sup> 事実、一三世紀のジェノヴァの公正証書はこの点について興味深く、その詳細をわれわれに伝えている。まず、ジェノヴァでもシャンパーニュ大都市においても為替の価格すなわち為替相場が、常にプロヴァン貨の一二デニエの一スーを基準に建てられ、ジェノヴァ貨

のデニエの変数で表現されていたことが教えられる。別言すれば、シャンパーニュ大市がジェノヴァやイタリアの他の諸都市の為替の基準となっていた (*donner le certain*) のであつて、<sup>(46)</sup> この点の確認はきわめて重要で、記憶にとどめておかねばならない。

利子が為替の価格の中に含まれていたという証拠は、R・ドゥエールによつて公刊された他のいくつかの公正証書の中にみられる。<sup>(47)</sup> 公証人B・フォルナリ (*Bartolomeo Fornari*) に作成された一二五二年一〇月三十一日付の公正証書を例証にとりあげよう。<sup>(48)</sup> この証書によれば、シエーナのR・ブラマンツォーニ (*Roffredo Bramanzoni*) は、ジェノヴァ貨で $\text{£}1416\text{ }13\text{ }4$  d. をG・オルツレマーレ (*Gehardo Oltrenare*) から為替を理由として (*nomine cambii*) 受領した旨を認め、その等価すなわちプロヴァン貨一〇〇〇リーブルをトロワの次回の大市で「公正決済 (*rectum pagamentum*)」期間終了以前に返済する旨を約束している。<sup>(49)</sup> もしそこで返済されないならば、債務者は、ジェノヴァにもどつて、聖母マリアの御潔めの祝日、すなわち一二五三年二月二日以前に債務者に支払わなければならない。その場合、プロヴァンの一〇〇〇リーブルは、プロヴァン貨一二デニエの一スーあたりジェノヴァ貨一デニエの比率でジェノヴァ貨で返済される。もし支払期日に支払をなしないならば、慣習にしたがい、債務者は彼のもつところの諸権利を放棄し、彼の全財産を担保として、当該金額の二倍を支払う旨を約束している。この証書は、二重の取引の態容を明らかにしている。すなわち、ひとつはジェノヴァからシャンパーニュ大市宛の、ジェノヴァ貨をプロヴァン貨に転換する為替であり、他は逆の方向でのプロヴァン貨からジェノヴァ貨への再転換の戻し為替である。第一の為替の価格は明記されていないが、しかし原文は必要な数字を与えているので、容易に計算される。この契約によれば、ジェノヴァ貨 $\text{£}1416\text{ }13\text{ }4$  d. は、しばらくの猶予の後、シャンパーニュで支払われるプロヴァン貨一〇〇〇リーブルに等しい。この等式から計算すると、プロヴァン貨一二デニエの一スーは、ジェノヴァではジェノヴァ貨一七デニエに等しいことになる。上にみたように、プロヴァン貨からジェ

ノヴァ貨への転換が一九デニエの相場で行われているので、一二五二年一〇月三十一日にプロヴァン貨一スーあたり一七デニエを受けとった債務者は、約三か月の期限の後、すなわち遅くとも一二五三年二月二日に、プロヴァン貨一スーあたりジェノヴァ貨一九デニエの返済を約束しているのである。したがって、プロヴァン貨一スー毎にジェノヴァ貨二デニエを、債務者は失い、債権者は得ることになる。この一方で損失と他方での利益は、手形割引から生じるものではなく、為替と戻し為替の間でのプロヴァン貨一スーの相場における二デニエの差から生ずる。<sup>50)</sup>

多分、プロヴァン貨一スーの基準相場は、ジェノヴァ貨で一八デニエあたりであつただろう。<sup>51)</sup> われわれが考察したところの契約が明らかにしているように、ジェノヴァに住む借り手は、シャンパーニュで支払われる一スーごとに基準相場より少なくしか受け取っていないかつた。別言すれば、プロヴァン貨の一スーは、ジェノヴァでは利子のために過少に評価されていた。反対に同じ理由からシャンパーニュではプロヴァン貨の一スーは、過大に評価されていた。したがって、シャンパーニュでジェノヴァ貨のデニエを売却した債務者は、ジェノヴァでプロヴァン貨の一スー毎により多くをジェノヴァ貨で返済する旨を約束しなければならなかつた。要するに為替相場は、ジェノヴァでは利子を差し引いて、シャンパーニュ大市では利子を加えて決められていた。その結果、ジェノヴァ・シャンパーニュ間を往復する資金の貸し手に、自動的に利益がもたらされていた。もしこの理解が正しいとするならば——分析された証書は微塵も疑問を残していない——、一三世紀の銀行家の利益は、その源泉を為替においていたのであつて、決して手形割引、すなわち直接、利子においていたわけではなかつた。言うまでもなく、債務者を犠牲に債権者に有利になるように決められた為替相場、すなわち為替の価格の中に利子が含まれているがために、利子は間接的に生じていた。<sup>52)</sup>

これに類似の証書は、善意で結ばれた真実の為替契約であるというより、むしろいつもでないにしても——われわれはこの点については留保しておく——たびたび偽装された貸付であつた。債務者がトロワの大市で彼の債務を

支払う能力をもっているとしても、契約を文字通りに信用するのは間違ひであろう。非常にしばしば契約当事者達は、債務者がトロワ大市で支払わないで、債務の決済をジェノヴァにおいて、プロヴァン貨一二デニエの一スーあたりジェノヴァ貨一九デニエに予め決められた相場で行うことを密約していた。こうした取り極めは、その後、擬制為替と称されることになるが、それはまず「博士衆」に、ついで法王によって、偽装された貸借、すなわち「虚偽の邪利息 (in fraudem usurarii)」契約と非難された。この点、カノン法の規範からみて議論の余地はない。実際、それは全くごまかしのための虚構にすぎないが故に、為替は擬制的と言われているのである。まず第一に、決済が他地では行われることがなく、第一為替の効力が反対の方向の、それも同じ当事者間での第二為替によつて無効にされることが、はじめから取り決められているが故に、それは為替ではない。その上、擬制的な、あるいは一定の相場に前もってきめられた戻し為替の相場は、市場で建てられている相場とほとんど関係がなく、はじめから確定された債権者の利得は、もはや為替相場の激しい変動に晒されることもないのである。したがつて、擬制為替がゲームのすべての規則を破っており、事実上、確実な利益を伴う、すなわち邪利息<sup>(53)</sup>の貸付であることは明らかである。

われわれの検討するこの事例では、債権者の利益は、三か月でジェノヴァ貨 $\text{£}$ 一四一六 一三 s. 四 d. の資本に對して $\text{£}$ 一六六 一三 s. 四 d. に達していた。つまりこれは、年率四六%にもなり、国際商業での利益率が一三世紀に大いに高まったことを考慮しても、法外なものである。しかし、この問題の契約が擬制為替ではなく、法外な利子も、債務者が支払の権利をもっているので、支払期日を延期することなく、大市で彼の債務を決済するようにさせる目的をもっていたとも考えることができる。この問題を解くには、当事者達の秘められた意図を知らねばならないということになるが、資料は、その点をば稀にしか明きらかにしていない。他の理由から、その後、資本の収益率や、それとともに利子率も、三〇〜四〇%の水準を維持できず、一四世紀中に次第に、二〇%、一五%、

ちうには一〇%にまで低落していった。<sup>(37)</sup>

- (41) Goldschmidt, *Universalgeschichte*, S. 415-416.
- (42) 実際、銀行家達は、借り手すなわち外国為替手形の売り手であるよりもむしろ、しばしば貸し手すなわち買い手であった。マルセーユの公証人アマリックの証書類(一二四八年)によれば、ピアツェンツァ、シエーナあるいはフィレンツェの銀行家達は、シャンパーニュ大市で支払われる為替契約におつてほとんど常に債権者であり、債務者であることはまれであつた(Biancard, *Documents sur le commerce de Marseille*, t. I, pp. 268, 291, 299, 303 et passim; II, pp. 11, 20, 34, 101, 140, 151, 167 et passim (Documents Nos. 14, 81, 92, 102, 375, 396, 424, 564, 667, 730 etc). No. 一五六の契約は、銀行家が債権者ではなく、債務者であつたまれな事例を提供してゐる (*ibid.*, I, p. 329)。
- (43) Schaube, *Studien*……, S. 153 et suiv.
- (44) André-E. Sayous, "Le commerce terrestre de Marseille au XIII<sup>e</sup> siècle," *Rev. Hist.*, 163, 1930, pp. 44-45; cf. idem, "Les opérations des banquiers", *ibid.*, 170, 1932, p. 18.
- (45) Doehaerd, *Relations commerciales*, t. I, p. 102, pp. 128-129.
- (46) Lamberto Incarnati, *Banca e moneta dalle crociate alla rivoluzione francese : Le origini storiche dei problemi bancari e monetari contemporanei*, Roma 1949, p. 61.
- (47) R. Doehaerd, *op. cit.*, t. II, Nos. 131, 775, 776, 1027, 1064, 1066 et passim.
- (48) *Ibid.*, t. II, No. 775, p. 418.
- (49) トロワの寒冷大市 (la foire froide) の「公正決済」の期間は一二月三日に、すなわち大市開始後約一か月と為替が不決済とされる以前の二週間に終わる。シャンパーニュの大市分割については、以下を参照のこと。Francesco Balducci Pegolotti, *La pratica della mercatura*, Allan Evans, ed. (The Mediaeval Academy of America, publ., No. 24, 1936), p. 235; Elisabeth Basserman, *Die Champagnermessen*, Tübingen 1911, S. 14-18, et 25-28. 彼の R・フランドン・ショーンは、恐らくシャンパーニュ大市やイングラントとすら非常に活発な取引を行つていたのである。彼は、ジェノヴァで一二五三年三月の一月月だけでなく、少くとも一二二契約を結んだ。一〇契約は、総額プロヴァン貨四七〇〇リブルで、シャンパーニュで支払われ、一〇〇スターリング・マルクの二為替契約は、ロンドンで返済されるもので、他のポローニヤ貨と二八二三 s. 七 d. の為替は、二〇日後、ポローニヤで支払われるものであつた。Roberto Lopez, "L'attività economica di Genova nel marzo 1253 secondo gli atti

notarii del tempo." *Atti della Società ligure di Storia Patria*, t. 64, 1934, pp. 165-270. これらの契約において彼は、いつも借り手とのべられており、決して貸し手となっていない。それらのうち三つの契約は、すでにドゥエール女史によって公けられた。R. Doehard, *Relations*, t. II, Nos. 785, 793, 802.

- (50) 利益は、プロヴァン貨一スーあたりジェノヴァ貨二デニエ、すなわち二デニエの二〇〇〇〇〇倍である。なぜなら、一〇〇〇〇リーブルは二〇〇〇〇スーである。

・ジェノヴァで返済されるプロヴァン貨	ジェノヴァ貨
£1000 (為替相場 1 スー = 19デニエ)	£1583 6s. 8d.
・借り受けた金額プロヴァン貨	ジェノヴァ貨
£1000 (為替相場 1 スー = 17デニエ)	£1416 13s. 4d.

利 益	2d. × 20,000	£166 13s. 4d.
-----	--------------	---------------

- (51) 基準相場というのは、利子を差し引いたプロヴァン貨一スーあたりのジェノヴァ貨の価格と理解されねばならない。しかし、その価格に影響を与えるその他のあらゆる要因をも考慮されねばならない。この基準相場は、常に利子が事実上、市場相場の中に入っているので、ひとつの虚構である。

- (52) R・ドゥエール女史は、理由を説明することなく、同じことを確認している (*Relations commerciales*, I, p. 128)。その後、ゴルトシュミットにならうて彼女は、正貨現送というつまらぬ問題を導入しようとしている。現送費用は、利子と何ら関係がなく、為替相場に別な形でかわる。

- (53) 「受けとる金額が決まっている時、貸し手は、真生為替の本質に反して、定まった、確実な利益を享受する。そしてこの種の為替は、まさに金利生活者の為替にすぎず、為替の名を騙った利子つきでの貨幣の贈与である」(J. Phooosen, *Les loix et les coutumes du change des principales places de Europe*, Amsterdam 1715, p. 157)。この書物のオランダ語版は、以下の文に生業生とした表現をいかにつづる。"ofte een verbloende gelt-geving op Interest", (J. Phooosen, *Wissel-Stijl tot Amsterdam*, Amsterdam 1711, chap. 39, § 3, p. 295). Cf. A. Lattes, "Genova nella storia del diritto cambiario", *Rivista del diritto commerciale*, 13, fasc. I, 1915, p. 188. ラッテスは「貸し手がいかにも利益を得るのかを説明している」。

- (54) Armando Sapori, "L'interesse del danaro a Firenze nel Trecento: dal testamento di un usuraio", *Archivio storico italiano*, 7<sup>e</sup> série, t. X, 1928, pp. 161-186. ゼーレ田録をいふ。Sapori, *Studi di storia economica medievale*, 2<sup>e</sup> éd., Firenze 1946, pp. 95-115.



## 五 シエーナにおける為替契約——同一地での期限付為替——

ジェノヴァの公証人の略註によれば、為替契約は、一般にジェノヴァで貸付られ、他地で返済される前貸にかかわっている。少なくとも外見上は、場所の相違が遵守されていた。これに反してシエーナでは一三世紀のはじめに活動していた二名の公証人の証書の中に、同一の地で結ばれ履行される為替契約のいくつかの事例がみられる。それらの契約の大部分では、債務者は、ある金額の外貨を受領した（「買った」）ことを認め、ある期間後、その「価格」をシエーナ貨幣で返済する旨を約束している。<sup>56</sup> 公証人につかわれている用語から、M・キアウダーノは、この為替契約がシエーナでは「売買（emptio venditio）」とみなされていたと主張している。実際、確定日払の為替取引が不可避免的に信用取引を伴うがゆえに、それが貸付であることは確かである。

問題の公正証書の検討から、貸し手がほとんどつばら銀行商会であることが明らかとなる。そのひとつのサリンベーネ（Salimbene）商会は、当時サリンベーネ・ディ・ジョバンニ（Salimbene di Giovanni）なるものによって経営されていた。ほとんど例外なく、借り手は小商人や親方達で、彼等の取引はシエーナかその周辺に限られていた。

公証人アップリエーゼ（Appuliese）の一二二一年と一二二三年の公正証書原本綴には、為替取引にかかわる四四の契約がみられる。その内四一契約がその地の為替で、二契約が隔地間のもので、一契約が為替のみならず、未鑄造の銀購入にかかわる。<sup>56</sup> これら四一契約の総額は、シエーナ貨で九〇九 九 九 s. 六 d. 及びピサ貨で六一六にのぼる。つまり、一取引平均九二三である。最小の契約は四しかならず、もつとも高額の二契約は、各々シエーナ貨で一〇〇と九二 九 s. である。<sup>57</sup> 主要な資金供給者は、M・マッコリーニ（Monaldo Maccolini, 一〇契約）、I・ヴィンチェンティ（Udibrandino Vincenti, 六契約）、A・ベヌッチ（Alberto Benucci, 四契約）、F・ヴェンチェ

カステッリ (Federigo Veneccastelli, 三契約) 、L・ベランテ (Leonardo Belante) と彼の商会 (三契約) で、すべてこれらの商会は、遠隔地取引か、あるいは貨幣取引に従事していた。隔地間為替にかかわる二契約のうち、認証の手続きをとった受取証書であるが、ひとつは各々シェーナ貨で $\text{₡}$ 一五〇の、印の捺された二枚の証書に関するもので、他のひとつは、シャンパーニュで支払われるプロヴァン貨 $\text{₡}$ 二七の大額でない「為替を原因とする契約証書 (instrumentum ex causa cambii)」である。<sup>58)</sup>

公証人イルディブランディーノ (Ildibrandino) の公正証書の調査も、それほど違わない結果を与える。一二二七年一月二七日と一二二九年四月二日の間に登記された三二の為替契約のうち、二六契約はその地の為替契約に、三契約が隔地間為替に、その他の三契約は貴金属すなわちセネガルからの砂金と、銀地金の信用売りにかかわっている。<sup>59)</sup>最後の三件では、想像しうるように契約当事者である売り手も買い手も銀行商会である。<sup>60)</sup>隔地間の為替に関する契約は、同様に銀行家同士の間で結ばれたもので、シェーナでその地の貨幣で貸付けられ、シャンパーニュ大市でプロヴァン貨で返済される貸付について語っている。<sup>61)</sup>債務者に与えられた猶予は、約三か月から六か月に及ぶ。三つの為替のうち二つは、同じ日 (一二二七年二月八日) に契約されており、金額 (シェーナ貨 $\text{₡}$ 四九五 一六 s. 八 d.) で、ラニーの次回の大市で支払われるプロヴァン貨 $\text{₡}$ 二〇〇に等しい。<sup>62)</sup>これら二件では、ピストイア (イタリア中部トスカーナ州の都市——訳者) の同じマーチャント・バンカーが資金供給者となっている。しかし、借り手は、最初のはサリンベネ商会であり、二番目のはレイネリオ・デ・フォルカルケリオ (Reinerio de Folcalcherio) 商会であった。これら二行の銀行商会の間で、借入額を折半する取り極めが結ばれていたことは明きらかである。金融シンジケートは、今に始まったわけではない。

シェーナ自体で履行される二六の為替契約についていえば、総額はシェーナ貨で $\text{₡}$ 一四七一一一 s. となり、 $\text{₡}$ 四八〇の飛び抜けた一契約をおくと、一契約あたり平均 $\text{₡}$ 四〇である。貸し手は相変らずマーチャント・バンカ

———の中でサリンベネ商会がもつと多く、一一契約、£三九〇 八s. (シエーナ貨) を取り扱っている——、借り手は中位の商人達であった。シエーナ貨で£四八〇の契約はただひとつ例外である。この金額は、ジュード・ディ・アルドブランディーニ・ヴィラーニ (Guido di Aldobrandini Villani) 商会が両商会ともかなりの大商会であるギニバルド・サラチーニ (Ghibaldo Saracini) 商会と<sup>(63)</sup> ヂェード・ウゴリーニ (Guido Ugolini) 商会に掛で売却したプロヴァン貨£四七〇の「価格」をあらわしている。通常、信用は短期で、三か月を超えることはめつたになかった。

これらの分析から一二世紀のはじめシエーナの銀行家達が、外貨の即座の供与とシエーナ貨でのその等価の爾後の支払を伴う為替という法的装いで貸付を偽装するのを好んだということがわかる。<sup>(64)</sup> 地の相違は、為替の合法性の必要不可欠な条件をいまだ構成していなかった。しかし、この種の取引——真正であろうが、擬制であろうが——は、神学者の非難を長く免れることをできなかった。外貨の価格の中に利子を混入させることは非常に簡単であった。「博士衆」は、彼等の立場を明確にし、次第に地の相違の遵守を力説しだした。マーチャント・バンカー達は、間もなく、外地に恒常的に居住する代理人と協同して活動するのを慣行とするようになるにつれ、自発的に地の相違を遵守するようになった。

他の注目すべき点は、ジェノヴァやマルセーユの公証人の公正証書が一二二五年頃、シャンパーニュ大市との為替取引におけるシエーナやピアツェンツァ人の積極的役割を明らかにしているにもかかわらず、少数の契約しかこれらの為替取引にかかわっていないことである。そうした証書が存在しないことから、シエーナのマーチャント・バンカー達が彼等の間では公証人事務所にたよることなく、しばしば私署証書で清算していたと想像される。実際、公証人アツプリエーゼ (Apuliese) の契約は、債務者の商会自身の印を備え、シャンパーニュで契約され、シエーナで支払われる二つの為替にかかわる債務証書の存在をほのめかしている。<sup>(65)</sup> これは、早や真実の為替手形、あるいは

はその代りの類似の証書なのであろうか。大いにそのように思われる。かくしてわれわれは、「為替を原因とする約束証 (promissio ex causa cambi)」からいわゆる為替手形への移行の研究に導かれる。

- (55) Mario Chiaudano, "Note sul contratto di cambio in Siena nella prima metà del secolo XIII," *Studi in memoria d'Alto Albertoni*, t. III, Padova 1938, pp. 55-72. 上の研究に関する A・ラッテスによりなされた考察や考慮がなされている。A. Lattes, "Note per la storia del diritto commerciale", *Rivista del diritto commerciale*, 33, fasc. 1, 1933, pp. 12-14. キンヤダーンは「公証人イルディブランドーノ (Ilidbrandino)」の証書原本集成への彼の序文の中でのこの問題を再び論じているがしかし、ラッテスの非常に有用な示唆を何ら考慮することなく、同じ見解を繰り返しているにすぎない。
- (56) Dina Bizzari, *Imbrevitature notarili. I : Liber imbrevitaturarum Apulthesis notariorum communis Senarum, 1221-1223*, Torino 1934 (*Documenti e studi per la storia del commercio e del diritto commerciale italiano*, t. IV).
- (57) これら二件では「確定日払ひ支払われる他の国のデニエと交換にシエーナ貨のデニエが即座に供与されることになつてゐる」(*ibid.*, p. 158, No. 388, et p. 204, No. 502)°。その三分の一を「シエーナの商会は「未鑄造の銀を供給してゐる」。
- (58) *Ibid.*, p. 87, No. 211, No. 495
- (59) Dina Bizzari, *Imbrevitature notarili. II : Liber imbrevitaturarum Ilidbrandini notariorum, 1227-1229*, Torino 1938 (*Documenti e studi etc.*, t. 9) プリン・キヤンダーンの序文参照。
- (60) *Ibid.*, Nos. 10, 287, 302.
- (61) *Ibid.*, Nos. 34, 35, 214.
- (62) したがつて為替相場は「プロヴァン貨一スーにつきシエーナ貨二九・七五デニエであつた。
- (63) *Ibid.*, p. 65, No. 111.
- (64) 同じようなやり方はボローニヤでもなされ「ウーゴ・ニコリーニに研究されてゐる°。Ugo Nicolini, *Studi storici sul paghero cambario*, Milano, 1936 (*Pubblicazioni della Università cattolica del Sacro Cuore, serie seconda, scienze giuridiche*, t. 51).
- 法律的観点から考察された本書からは「残念ながら有益な情報を何ら見出しえなかつた。
- (65) Bizzari, *Liber imbrevitaturarum Apulthesis*, No. 211, p. 87. 上の契約はまたキナーの註意をうけた°。André-E. Sayous, "Dans l'Italie, à l'intérieur des terres: Sieme de 1221 à 1229," *Annales d'hist. éconóm. et soc.*, III, 1931, p. 204.

## 六 「為替を原因とする契約証書」から為替手形へ

ジェノヴァ、マルセーユやシエーナの公正証書は、シャンパーニュ大都市に組織的貨幣市場が存在しており、そこでは為替相場がすでに需要と供給の法則に支配されていたことを立証している。ここでは国際金融センターとしての大都市の役割を論ずることはできない。しかしピレンヌが、シャンパーニュ大都市が「当時のヨーロッパにおいて萌芽的な手形交換所の役割を演じた」と書いた時、彼はこの機能の重要性を十分に予見していた。シャンパーニュ大都市は、隊商的商業の後退と同時に一三世紀末頃に危機に陥り、一三二五年には完全に衰退してしまった。商人達はシャンパーニュ大都市に出向いていくかわりに、パリ、ブリュージュ、ロンドン、その他の都市に恒常的な支店や代理店を設置した。十中八九、この改革は、ジェノヴァやヴェネチアのような海港都市からよりも、シエーナ、フイレンツェ、ルツカの内陸都市から発したと思われる。<sup>(67)</sup> 商業方式のこうした転換は為替契約の上にも影響を及ぼし、やがて公正証書は単なる急送商用状に取ってかわられた。

この発展は、一挙に実現されたのではない。わずかな混沌とした資料から辛うじてその過程を構成しなおすことができる。それらはひとつの仮説を組みたててのに十分な手掛りを与えている。ある人達は、為替手形が「為替を原因とする契約証書 (*instrumentum ex causa cambi*)」から、すなわち公正証書形式の為替契約から直接、生まれたのではなく、その起源を補足的な書類である「支払命令状 (*lettera di pagamento*)」に求め、それによって外国為替手形の売り手は、契約の締結を彼の組合員、代理人あるいは駐在員に通告し、公正証書の中で約束された金額の支払指図を与えたと考えた。<sup>(68)</sup> この魅力的な説明は一部の真実を含む。たとえその考えを斥けるとしても、商人達が旅商をするのをやめ、自分の帳場から諸取引を指揮することが習慣となり、外地ではそこに定住するコルレス先によって代表されるにいたるとすぐに支払指図が必要になることを認められねばならない。約束証が認証された

形式のものでさえ、コルレス先が債務者の代理人、仲間すなわち同じ組合員でないかぎり、それは契約の当事者でないコルレス先とは決して結びついていなかったことは明らかである。かくして、為替手形は、隊商的商取引の衰退と、N・S・B・グラーズ教授の、そしてY・ルノワール氏によってフランスに導入された懐しい表現をつかうと、「滞在的」商取引に徐々に取ってかわられたことの結果として生まれたと言えよう。<sup>(69)</sup>

こうした動向は、一三世紀中葉から明確に現われ始める。<sup>(70)</sup>それはまず、一二五九年二月一日、ジェノヴァで結ばれた二つの契約にみられる。ひとつは、これまでどおりの形式で作成された債務の認諾証書で、イード・レルカリオ (Ido Lercario) なる者と彼の仲間は、オットボノ (Ottonono) とピッカミリーオ (Piccamiglio) の二人の兄弟からジェノヴァ貨である金額を受領した旨を認め、ラニーの次回の大都市でその等価、つまりプロヴァン貨九〇〇リーブルを返済する旨を約束している。そして、もしこの返済が行われないならば、ジェノヴァでプロヴァン貨一スーあたりジェノヴァ貨一九デナリの相場で返済することになっている。これは擬制為替ではなくて、契約に導入された保証条項である。その証拠は、同じ公証人にとって同日、作成され、受理された第二の公正証書によって与えられている。それは、債務者の協同経営者である<sup>故</sup>グリエルモ・レルカリオ (Guglielmo Lercario) の資産の換金と債権の取り立てによって手にした準備金から差し引いて、さきにのべられているプロヴァン貨九〇〇リーブルの支払を、債務者は、シャンパーニュにいるコルレス先のグリエルモ・ブククチオ (Guglielmo Buccuccio) に指図した命令状である。

このあとの場合、為替契約は二通の書類をもっている。ひとつは債務の認諾証書であり、他は支払指図状である。しかしながら、フィレンツェの大商会アッチアイウォーリ (Acciaiuoli) 商会のフランドルの代理人たるN・スピリアーティ (Nado Spigliati) の求めに応じて一三三〇年三月三〇日にブリュージュで作成された拒絶証書が語っているように、<sup>(72)</sup>間もなく、支払指圖書は、もはや公正証書をもってする支払命令状という形で与えられず、私文書たる

信書に取って代わられた。この証書によれば、ジェノヴァのアッチアイウオーリ商会の代理人 N・グッチアルディーニ (Niccolo Guicciardini) が為替で A・グリマルディ (Antonio Grimaldi) から受領したジェノヴァ貨 1 三四二 一〇 s. の等価たるフランドル貨 六〇〇ロワイヤル (一ロワイヤル = 二四グロ) を、スピリアーティが支払う旨を明言している。<sup>73</sup> 債権者の代理人である A・ディ・アルバーリ (Andriolo di Albari) が支払われた正貨を拒否したので、債務者の代理人であるスピリアーティは、正式に支払を拒絶する。原文からはその理由は明らかではないが、ただアッチアイウオーリ商会は、この拒絶から生じた費用と損失の責任を先方に負わせている。しかしながら——興味深いことには——、契約当事者達が公正証書の紛失という大きな不安を避けるために、アッチアイウオーリ商会によつて結ばれた契約を証明する公正証書の原本を、ブリュージュに送付しないことで合意した旨を知らせる、N・スピリアーティ宛に送付された通知状の原文を拒絶証書は含んでいる。<sup>74</sup> N・スピリアーティは、A・ディ・アルバーリの単なる受領証と引換えに支払い、もとの公正証書を破棄させることができるように支払済たることをジェノヴァに通知すべき旨の指図を受けている。

かくして、この拒絶証書は二つの書類の存在を明らかにしているのである。すなわち、ひとつは為替契約を証明する公正証書である「契約証書 (instrumentum)」であり、いまひとつは契約を履行させる通知書である。しかしそれはいまだ為替手形ではない。なぜならばそれはいまだ債権者に送付されるのではなく、直接、振出人によつて支払人宛に送付されていたからである。したがつて、そこには「為替を原因とする契約証書 (instrumentum ex causa cambii)」を真実の為替手形に結びつける鎖の最後の環が欠けている。

ところで、右の諸資料は決定的な証拠を提供していない。なぜならば、その資料は一三三〇年のものだが、別の資料によれば、その時期にはこの発展がすでに完了していたからである。

ところで、為替手形——「支払命令状 (lettera pagamento)」とも呼ばれていた——は、一三世紀末までにフィ

レンツェ人やシエーナ人達によってつかわれていたと言われている。<sup>75</sup> フィレンツェのチェルキー (Cerchi) 商会在イングランドの代理人宛に送付した一二九一年三月二十四日付 (新暦) の手紙がそのことを証明しているように思われる。<sup>76</sup> チェルキー商会は、 $\text{£}1$  一四 s. 8 d. 英貨の爲替に、その現金化と取立ての親会社への通知の指図を付け加えていた。これに対して、なかなか一三二三年七月八日にブリュージュで支払われる六〇〇ロワイヤル (一ロワイヤル＝トゥール貨二四グロ) の爲替に関する一三二三年六月一日の契約が証明しているように、ジェノヴァの人々は、一四世紀に入つてすら公正証書の形をとる「爲替を原因とする契約証書」を使いつづけていた。<sup>77</sup> ヴェネチアとなるとジェノヴァよりも旧来の方法に忠実であつた。一三五一年においても依然、人々は公正証書を作成してもらうべく、公証人に頼つていた。すなわちフィリッポ・モローネ・デ・コーメ (Filippo Morone de Côme) なる者は、公正証書によつて二ヶ月後ブリュージュで返済される一〇〇〇ロワイヤルの債務者であることを認めていた。<sup>78</sup> それゆえ、一三三〇年の拒絶証書は、債権者とフランドルにいるその代理人がジェノヴァ人であるのに対して、共に大商会アツチャイウォーリ商会の代理人である債務者とブリュージュにいる代理人がフィレンツェ人であることから、特別な事例をなしていると思われる。「爲替を原因とする契約証書」と通知状との使用は、ジェノヴァ人とフィレンツェ人との間の方式の対立から説明されうる。前者のジェノヴァ人は公正証書を要求し、後者のフィレンツェ人は単に私文書的借用証を好んでいた。

爲替手形の生成を理解するためには、多分、もつとも単純な説明に依拠すべきであろう。一三世紀以降、いやそれ以前からさえ、取引の複雑さの増大から、商人は通信と簿記の整備の必要に迫られていた。恐らく、セユーが指摘しているように、取引の増大に伴い、商人達に対してしばしば公証人をなすことを許す指示がなされるようになっていったのであろう。<sup>79</sup> その上、いつの時代でも商人達は急がされる者であつた。ところが公正証書の作成には、あらゆる場合、多くの時間を要した。すなわち契約当事者は、公証人のもとに出頭し、証人を招致し、



公正証書の起草や朗読等々に立ち合わなければならなかった。しかも紛失した場合、公正証書を取りかえることは困難であつた。<sup>(69)</sup> 商人達が正式な手続きをやめ、公正証書を簡単な借用証にとつてかえることによって、より手取り早い方法をさがし求めたことは何も不思議なことではない。さらに、あらゆる地で信用を有していた銀行商会の代理人の署名は、実際、公証人の署名に備いつていた。<sup>(81)</sup> 守旧的かつ伝統的な都市であるジェノヴァやヴェネチアよりも、改革の採用により迅速であつたトスカーナの諸都市によつて為替手形が導入されたことは、もはや疑いのないところである。ついでに、保険契約に関する同様な相違を記しておこう。一四世紀中、ジェノヴァでは公証人をつかい保険証書をラテン語で起草してただけでなく、保険を「貸借 (mutuum)」あるいは「売買 (emptio venditio)」に偽装していたのに対して、ピサやフィレンツェでは保険証書は「イタリア語で、しかもブローカーによつて作成されていたのである」。<sup>(82)</sup>

(69) Pirenne, *Le mouvement économique et social*, p. 92.

(70) André-E. Sayous, "Les transformations des méthodes commerciales dans l'Italie médiévale", *Annales d'hist. écon.* et soc., I, 1929, pp. 161-176. Id., "Sienna, de 1221 à 1229", op. cit.

(81) これは「ラテン語の見解による」(Goldschmidt, *Universgeschichte*, S. 436)。<sup>(81)</sup> の見解はA・ラッテスに踏襲されてくる (Alessandro Lattes, "Genova nella storia del diritto cambiario", op. cit., p. 188; 以下の書に与えた彼の説明、Bensa, "Francesco di Marco da Prato", *Rivista del diritto commerciale*, 27, fasc. I, 1929, p. 101-102; A. Lattes, "Note per la storia del diritto commerciale", *ibid.*, 31, fasc. I, 1933, p. 538 における商法史における彼の略称)。<sup>(82)</sup> それに対つて、この見解はシャウベとベンサをローマに結びつけ批判された (Schaube, "Einige Beobachtungen", S. 116-119, 127; Bensa, "Francesco di Marco", op. cit., p. 155; Sayous, "L'origine de la lettre de change", op. cit., p. 103)。

(69) 「定住商人が特別に創造したものは、振り出される為替手形による」(N. S. B. Gras, *Business and Capitalism*, p. 143, 植村元寛訳『ロジニスムと資本主義』一六六頁)。<sup>(70)</sup> Yves Renouard, *Les hommes d'affaires italiens du moyen âge*, p. 174.

(70) Schaube, "Einige Beobachtungen", S. 135.

(71) Dehaerd, *Relations commerciales*, t. III, Nos. 1126, 1127, pp. 617-618.

(72) フィンシェ国立古文書館' Riferimazione : 30 Marzo 1330. )の証書は、R・D・ヴィッドソンによってとりあげられている (Robert Davidsch, *Forschungen zur Geschichte von Florenz*, t. 3, Berlin 1901, No. 962)。彼は、この証書を引受手形として叙述しているが、われわれが原本をみたところによれば、それは拒絶証書である。

(73) したがって為替相場は、一ロワイヤルあたりシェンヴァ貨四四の九である。

(74) 原文は以下のとおりである。"Noi siamo in concordia con lui (Antoniotto Grimaldi) di non farla comparire e di non mandarla costa, perché se la si perdesse sarebbe grande briga a fare na rechonpire" ("もし公正証書が紛失するべ、それを取り代えさせるのは非常にわずらわしいので、われわれはそれが人目に触れるのを避け、貴地に送付するのを取りやめることに彼(アントニオット・グリマルディ)と合意してゐる")。

(75) Schaube, "Einige Beobachtungen", S. 147.

(76) Paolo Emiliani-Giudici, *Storia politica dei municipi italiani*, Firenze 1851, t. 2, p. 257. ユルトシヨミットがこの問題について主張している(『Goldschmidt, *Universalsgeschichte*, S. 439)。他の事例をシャウベが提供している(Schaube, "Die Anfänge der Tratte", S. 5-7)。これに反して、シャンパーニュ市にいるシェーナのトロメー (Tolomei) 商会の代理人からの一二六九年の手紙は、いまだ公正証書によって認識された為替について語っている (Mario Chiaudano, "Contratti di cambio in una lettera mercantile senese inedita del 1269," *Atti della Reale Accademia delle Scienze di Torino, Classe di Scienze morali, storiche e filologiche*, t. 66, 1931, p. 646)。

(77) Doeberd, *Relations commerciales*, t. 3, p. 1098, No. 1806.

(78) Gerolamo Biscaro, "Contributo alla storia del diritto cambiario," *Rivista italiana per le scienze giuridiche*, 29, 1900, pp. 197-198.

(79) Sayous, "Le capitalism commercial et financial," op. cit., p. 278.

(80) 注 (74) 参照。

(81) シャウベによれば、過渡期においては、当該手形金額が大きい時や、あるいは振出人と振宛人が同じ商會に属さない時には公正証書が使われた(Shchaube, "Die Anfänge der Tratte", op. cit., p. 13)。この点、大いにありうることである。

(82) Florence Adler de Roover, "Early Examples of Marine Insurance," *The Journal of Economic History*, 5, 1945, pp. 186-187, cf. Schaube, "Einige Beobachtungen," op. cit., S. 147.

## 七 「為替を原因とする契約証書」と為替手形との純粹な形式上の相違

為替手形の起源に関するわれわれの研究は、為替手形が「為替を原因とする契約証書」に由来するというL・ブランカール (Louis Blancard) に一八七八年に提起された主張に、直ちにわれわれを立ち返えらせる。<sup>(83)</sup> 類似の契約にかかわり、公証人は、この契約証書に約束証の形式を与えていた。それによつて、ある金額を為替で受領した債務者は、その等価を他地で債権者の代理人 (certo misso) に返済する旨を約束していた。<sup>(84)</sup> この返済が債務者自身か、あるいは彼の代理人によつてなされるかは、どちらでもよかった。為替契約を構成するすべての要素は、すでに結びつけられている。ただ契約履行の証書はいまだ為替手形ではない。

公正証書であるのか単なる私文書たる借用証であるのかということであれば、実のところ、形式は副次的な要素にすぎず、契約それ自体の性格を何ら変えるものではない。われわれの見解では、為替手形の歴史研究に専念してきたドイツの法学者は、この問題を重視しすぎた。中世の法学者により近い一七世紀の法律家達は、同じ誤りを犯しはしなかった。とりわけ、S・スカッチャ (Sigmundo Scaccia) は、きまつた形式というものは何ら存在せず、為替契約が公正証書によつて、あるいは私署証書あるいはもつと頻繁に単なる借用証によつて確認されうるという事実を説明している。彼は、彼の時代にいまだ使われていた幾つかの形式の事例すら与えている。<sup>(85)</sup>

したがつて振出される為替の導入が「為替を原因とする契約証書」の完全な消滅をもたらしたと考えるのは誤りである。スペイン・アメリカ貿易においては、一六世紀中もいまだそれが使われていたのである。とくにセヴィリヤでは公証人達は、時々スペインで受領した金額をサントドミンゴで返済する旨を約束した契約を作成する仕事

に従事していた。<sup>(86)</sup>「為替を原因とする契約証書」が好まれたのは、多分、未開発諸国とのいまだ十分組織されてい

ない商業において、真正な公正証書だけが債権者に十分な保証を与えることができたからであろう。

(83) 「この契約（為替契約）は、委託（mandat）ではなく手形（billet）の形をとって作成されていた。それが委託の形をとって作成され、引受によってしか手形に転換されない実際の為替手形から区別するものである」（L. Blancard, "Note sur la lettre de change à Marseille au XIII<sup>e</sup> siècle," *Bibliothèque de l'Ecole des Chartes*, t. 39, 1878, p. 110.）これは「billet」（手形）という語のつかい方が適切でないことを除いて全くそのとおりである。公正証書は、手形（billet）ではなく、支払約束すなわち債務の自認を含みうる。

(84) 類似の契約には、通常の貸付、海上貸付、海上為替さらには掛売りがあった。この点については、われわれはC・フロイン

への意見に一致してゐる（Carl Freudent, *Das Wechselrecht der Postglossatoren*, Leipzig, 1899-1909, t. 1, S. 3 et suiv.）。

(85) S. Scaccia, *Tractatus*, § 1, quaest. 5, No. 10 et suiv.  
(86) André-E. Sayous, "Les débuts du commerce de l'Espagne avec l'Amerique", *Rev. historique*, 174, 1934, pp. 29 [213], 38-39, doc. No. 5. 同上誌から抜粋された論文にのみ、いくつかの証拠書類が含まれている。

（未完）

（訳者、記）本書の訳出にあたって、アレグリーノ・アレグリーニ司祭（多久カトリック教会）、古賀和文氏（本学経済学部）からご教示をえた。記して謝意を表したい。また塙浩「為替手形史に関する一所説——R・ドゥ・ローフェル説の紹介——」（野田良之先生古稀記念論文集『東西法文化の比較と交流』有斐閣、一九八三年）を参照させていただいた。